

延元元年丙子

正月十日

足利尊氏京師ヲ犯ス、天皇神器及ヒ法皇ヲ奉シテ延曆寺ニ幸ス、賊將細川定禪京師ヲ陷レ、皇居ヲ燒ク、尊氏京師ニ入ル、太平記、梅

正月廿七日

官軍京師ヲ收復ス、車駕還テ成就護國院ニ御ス、神皇正統記、皇

二月二日

天皇藤原家定ノ華山院第二移御ス、歷代皇記、皇

二月廿九日

改元、元弘日記、其書、皇年代皇記、

三月四日

新田義貞ニ詔シテ山陽山陰十六國ヲ領シテ、足利尊氏ヲ討セシム、太平記

四月六日

後伏見天皇崩ス、皇年代皇記、歷代皇記、

五月廿五日

足利尊氏九州ノ兵ヲ率テ京師ヲ犯ス、新田義貞兵庫ニ防戦シ利アラズ、楠木正成之ニ死ス、太平記、梅松論、

五月廿七日

天皇又神器ヲ奉シテ延曆寺ニ幸ス、光嚴上皇疾ト稱シテ京師ニ留ル、元弘日記、其書、皇年代皇記、

六月十四日

尊氏花園法皇、光嚴上皇、豐仁親王ヲ奉シテ管テ東寺ニ移ス、皇年代皇記、太平記、

六月晦

八月十五日

新田義貞尊氏ヲ東寺ニ攻テ利アラズ、名和長年之ニ死ス、太平記
足利尊氏豐仁親王ヲ以テ帝ヲ京師ニ稱ス、之ヲ光明院ト爲ス、
建武ノ號ヲ用フ、四位十三年、年號四、建武二、曆應四、康

九月

是ヲ北朝ノ始トス、
興福寺ノ僧徒叛シ、足利高經小笠原貞宗等ト官軍ノ糧道ヲ扼ス、

十月九日

足利尊氏僞テ降ヲ請フ、之ヲ聽ス、新田義貞ニ勅シテ、皇太子ヲ奉シテ、專ラ軍國ノ事ヲ勾當シ、北國ニ往テ更ニ經畧ヲナサシム、太平記

十月十日

車駕京師ニ還リ、華山院ニ御ス、尊氏兵ヲ以テ監守シ、公卿ノ官爵ヲ奪ヒ、將士ヲ拘ス、皇年代皇記、元弘日記、其書、太平記、

十一月二日

尊氏神器ヲ新主ニ傳ヘント請フ、僞器ヲ以テ之ニ授ク、太平記

十一月七日

尊氏建武式目十七條ヲ草ス、建武式目

十一月十四日

尊氏成良親王ヲ立テ光明院ノ太子ト爲ス、神皇正統記、歷代皇記、
源顯信兵ヲ伊勢ニ起ス、保曆間記

十二月廿一日

天皇夜神器ヲ奉シテ、潛ニ吉野ニ幸ス、楠木正行、和田正朝等

是月

延元二年丁酉三月六日

三月六日

九月二日

十二月廿八日

延元三年戊寅正月八日

正月八日

四月十三日

兵ヲ率井テ迎ヘ衛ル、太平
行宮ヲ吉野ニ造ル、神皇正統記
是ヲ南朝ノ始トス、是ヨリ兩朝分裂五十八年、京師ヲ爭ヒ相戰フ、

足利尊氏成良親王ヲ幽ス、太平記

金崎城陷ル、皇太子執ヘラル、中務卿尊良親王、新田義顯、氣比氏治等之ニ死ス、太平記

光明帝土御門東洞院内裏ニ還御シ、十二月廿八日即位式ヲ太政官廳ニ行フ、神皇正統記

是ヨリ後小松帝ニ至ル北朝諸帝ハ、閏位ナルヲ以テ即位ヲ記サス、年號ノミヲ記ス、

源顯家等鎌倉ヲ取ル、太平記

源顯家土岐頼遠、桃井直常等ヲ青野原ニ破ル、

尊氏皇太子及成良親王ヲ弑ス、太平記

四月廿二日

七月六日

七月十一日

閏七月二日

八月十一日

八月廿五日

九月十一日

是月

延元四年己卯三月

三月

八月九日

源顯家高師直ト界浦ニ戰テ之ニ死ス、太平記、公卿補任

高師直源顯信ヲ男山ニ攻メテ、石清水神宮ヲ焚ク、太平記、石記、

源顯信男山ヲ棄テ河内ニ走ル、

新田義貞越前ノ賊ヲ藤嶋ニ攻テ之ニ死ス、太平記

北朝足利尊氏ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス、足利官位記

源顯信結城宗廣ニ勅シ、義良親王ヲ奉シ陸奥ニ赴キ、東北ヲ

經略ス、源親房之ヲ輔ク、神皇正統記、元弘日記、義實

宗良親王新田義興ニ勅シ、東國ヲ經略ス、神皇正統記、元弘日記、義實

義良親王風ニ遇ヒ、漂テ藤島ニ至ル、尋テ行宮ニ歸ル、神皇正統記、太平記

懷良親王ヲ以テ征西大將軍ト爲シ、九州節度ヲ掌ラシム、阿蘇社文

義良親王吉野ニ還ル、神皇正統記

義良親王ヲ立テ、皇太子ト爲ス、新業和歌集

八月十五日

八月十六日

後村上天皇

九月

十月五日

十二月十七日

是歲

四月廿三日

四月廿八日

五月五日

九月三日

二月

天皇位ヲ皇太子ニ讓リ、神皇正統記、

天皇吉野ノ行宮ニ崩ス、吉野塔尾陵ニ葬ル、神皇正統記、

在位三十年、自千九百九十九年至二千

足利高經越前杣山城ヲ陷ル、北陸ノ官軍復振ハス、太平

天皇吉野ノ行宮ニ即位ス、時二年十二、權中納言藤原隆資、權

大納言藤原實世機務ヲ對掌ス、元弘日記、

遺詔ヲ宣シテ勤王セシム、太平

故護良親王ノ子陸良ヲ以テ征夷大將軍トナス、太平記、

脇屋義助伊豫ニ至ル、官軍大ニ振フ、是ヨリ先脇屋義助ヲ遣

ハシ、四國九州ノ諸軍ヲ總督セシム、太平

改元、元弘日

脇屋義助四國ニ卒ス、太平記、

世田城陷ル、大館氏明之ニ死ス、太平

源親房職原抄ヲ上ル、關城書

興國三年壬午

三月二十日

六月十九日

十月朔

是歲

興國四年癸未

是歲

興國六年乙酉

八月十七日

是歲

正平二年丙戌

是歲

二月廿九日

法勝寺災ス、太平

懷良親王島津貞久ヲ討テ之ヲ破ル、阿蘇

足利尊氏土岐賴遠カ光嚴上皇ノ駕ヲ犯スヲ以テ之ヲ誅ス、

太平記、

變災荐ニ見レ、痘瘡流行ス、皇代、

關大寶城陷ル、源親房吉野ニ走ル、別府

京師地震、皇代

兒島高德等脇屋義治ヲ迎テ兵ヲ起シ京師ニ入り、尊氏ヲ討

ント謀ル、事敗レテ信濃ニ走ル、

改元、太平

藤原良基ヲ關白ト爲ス、公卿

以下北朝置ク所ノ補任ハ之ヲ載セス、

九月十三日
貞平二年 亥丁

京師大風屋ヲ發ク、

五月六日

京師地大ニ震フ、國大

九月十七日

楠木正行賊將細川顯氏ヲ譽田林ニ邀ヘ撃テ之ヲ敗ル、太平

十一月廿六日

楠木正行進テ住吉ニ至リ、山名時氏細川顯氏ヲ撃テ大ニ之ニ勝ツ、國大 太平

正月五日

高師直師泰入テ寇ス、楠木正行及楠木正時、和田正朝、和田賢秀四條噉ニ拒戰シ之ニ死ス、天皇師直ノ兵ヲ避ケ穴太ニ幸ス、

正月十五日

師直火ヲ吉野ノ行宮ニ放ツ、神社佛寺蕩盡ス、太平

十月廿七日

北朝光明院位ヲ太子興仁ニ讓ル、是ヲ崇光院ト爲ス、即位三年 改元ニ、貞

十一月十一日

花園法皇崩ス、國大 公卿稱 任、皇胤 紹運錄、

五月二十日

京師地大震ヒ七月ニ至ル、天正本 太平

五月廿八日
十二月九日
正月七日
正月十六日
二月十九日
十一月七日
十二月廿三日
十二月廿八日

京師大水、國大 行日記
足利直義歸順、太平

足利直義進テ男山ニ據ル、桃井直常延曆寺ニ至リ、足利尊氏ニ京師ニ逼ル、

尊氏義詮西ニ奔ル、國大

京師地大震、皇代

足利尊氏足利義詮僞リテ降り、十月 崇光院及ヒ大弟直仁ヲ 廢シ、觀應ノ號ヲ去リ、正平ノ號ヲ奉ス、公卿稱任、 歷代皇紀、

北朝ノ僞器ヲ收メテ行宮ニ送ル、

光嚴院崇光院ヲ尊テ并ニ太上天皇ト曰フ、國大 皇代 皇紀、
前左大臣藤原師基ヲ以テ關白ト爲ス、源親房三宮ニ准ス、國大

北朝公卿百官悉ク吉野ノ行宮ニ詣ル、太平
疾疫流行、國大

文正
和元
七年
壬辰

是月
是歲

正月十五日

足利義詮黄金三十兩馬十四匹ヲ獻ス、後官百僚ニ金帛馬匹ヲ贈ル各差アリ、太平記

二月廿三日

北朝詔シテ京師ノ地子錢ヲ課スルヲ停ム、

二月廿六日

車駕賀名生即チ穴生ヲ發シ、廿八日住吉ニ至ル、楠木正儀、和田正忠等及ヒ諸卿兵七千餘人警衛ス、國太車駕男山ニ至ル、

閏二月十九日

諸將京師ヲ襲フ、足利義詮近江ニ走ル、太平記、國太

閏二月廿日

淮三官源親房及ヒ源顯能ニ勅シテ京師ノ庶政ヲ總決ス、太平記

閏二月廿一日

北畠顯能京師ニ入り、北朝ノ兩上皇及崇光院ヲ以テ男山ノ行宮ニ抵ル、國太

三月三日

兩上皇及崇光院ヲ東條ニ徙ス、國太、皇

三月十五日

足利義詮東山ニ屯シテ男山ニ逼ル、源顯能淀橋ヲ撤シテ之ヲ拒ク、太平記、皇

三月廿一日

足利義詮東寺ニ據ル、源顯能軍ヲ男山ニ退ク、太平記

四月廿五日

足利義詮男山ヲ犯ス、官軍引キ還ル、

五月十一日

天皇甲ヲ被リ馬ニ御シ、圍ヲ潰シ奈良ニ幸ス、藤原隆資等三百

餘人之ニ死ス、

六月二日

光嚴、光明、崇光三上皇ヲ賀奈生別宮ニ幽ス、國太、太平記

八月十七日

義詮彌仁親王ヲ奉シテ帝ヲ京師ニ稱ス、是ヲ後光嚴院ト爲ス、國位二十年、改元五、文和四年、延文五年、康安一年、貞治六年、安四、〇皇年、代畧記、皇胤紹運錄

九月

山名時氏等兵ヲ伯耆ニ起シ、出雲、因幡、隱岐歸順ス、太平記

十一月

足利直冬歸順ス、國太

正平八年癸巳
文和二年巳

四月五日

京師大風、眞言院壞ル、東寺長者補任

六月九日

諸將義詮ヲ神樂岡ニ破ル、義詮後光嚴帝ヲ奉シテ美濃ニ走ル、國太、太平記

六月十七日

官軍京師ヲ收ム、國太、太平記公卿ノ後光嚴帝踐阼ニ預リ、及ヒ其東走ニ從フ者ハ、一切官ヲ解キ居第ヲ沒ス、國太

七月廿四日

義詮京師ニ逼ル、官軍皆退ク、國太、太平記

九月廿一日

尊氏後光嚴帝ヲ以テ京師ニ入り、土御門ノ皇居ニ奉ス、東寺長者補任、國太

是月

足利直冬ヲ以テ總追捕使ト爲ス、國太

正平九年甲午

四月十七日

十二月廿四日

准三宮源親房吉野ニ薨ス、常樂記
足利直冬等進テ丹波ニ到ル、尊氏後光嚴帝ヲ以テ近江ニ走ル、太平記

正平十年乙未

正月廿二日

直冬等京師ニ至ル、尊氏後光嚴帝ヲ以テ延曆寺ニ據ル、東寺長者補任、太平記

二月

三月十二日

官軍屢、尊氏義詮等ト京師ニ戰ヒ、互ニ勝敗アリ、太平記
官軍足利尊氏ト大ニ七條ニ戰ヒ敗績ス、十三日遂ニ各引還ル、
北帝土御門宮ニ還御ス、國太、東寺長者補任、太平記

正平十一年丙申

七月三日

京師地大震、國太
大風洪水、太政官廳門倒ル、國太、東寺長者補任、
京師盜多シ、國太

八月十四日

正平十二年丁酉

二月十八日

光嚴院、崇光院、直仁親王ノ京師ニ還ルヲ聽ス、國太、太平記、皇年代略記、

正平十三年戊戌

五月廿四日

正平十四年己亥

四月九日

四月晦

十一月

十二月十八日

十二月

是歲

正平十五年庚子

四月廿五日

四月廿八日

正平十六年辛丑

十月

十二月八日

京師地大ニ震フ、歷代

新待賢門院崩ス、太平記

足利尊氏薨ス、常樂記、

畠山國清關東ノ兵ヲ率井テ京師ニ入ル、國太、太平記、

足利義詮ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス、公卿補任、太平記、

足利義詮兵ヲ發シテ南侵ス、

冬、車駕金剛山ニ入り、觀心寺ニ御ス、

陸良親王反シ、賀名生ノ行宮及ヒ公卿第宅ヲ焚ク、前關白師

基ヲ遣テ之ヲ討ス、太平記

新千載和歌集成ル、國太

細川清氏歸順ス、後愚昧記

官軍大舉シテ義詮ヲ討ス、賊後光嚴帝ヲ以テ近江武佐ニ走ル、

十二月十六日
十二月廿九日
是 歲

正平十七年 壬寅
貞治元年 寅

二月十一日
四月廿一日
是 歲

正平十九年 甲辰
貞治三年 辰

七月七日
是 歲

正平廿四年 乙巳
貞治四年 巳

正月
六月十三日
是 歲

正平廿一年 丙午
貞治五年 午

官軍京師ニ入り、義詮カ家ヲ焚ク、太平記、皇

賊勢又熾ニ、官軍引旋ル、

義詮京師ニ入ル、太平記

六月ヨリ十二月ニ至ル、京師大震九回、飢疫シテ死スル者街ニ

盈ッ、又六月雪ヲ雨ヲシ、人畜凍死ス、太平記、後

北帝還テ西園寺第二御ス、

土御門皇居修理成ル、北帝遷御、皇年代

大旱、諸國飢饉、太平記

光嚴法皇丹波山國ニ崩ス、皇年代

足利義詮三條坊門萬里小路ノ第ヲ營シ、以テ幕府トス、續皇居

京師屢、火アリ、疱瘡流行ス、大衆院

京師大風、眞言院壞ル、皇代記、大衆院

是 月
是 歲

正平廿二年 丁未
貞治六年 未

十二月七日
十二月廿九日

正平廿三年 戊申
應安元年 申

三月十一日

長慶天皇

在位五年、自二千二十九年至二千三十三年、正平一、光帝年號ニ仍ル、改元ニ應德二、文中二、三、

三月十一日

七月

十二月晦

正平廿四年 己酉
應安二年 酉

正月二日

三月

七月廿八日

京師飢疫、死者街ニ盈ッ、大衆院

土御門皇居造營成ル、有職抄

征夷大將軍足利義詮薨、公卿補任、皇

幕府制法六條ヲ下シテ、奢侈ヲ禁ス、應武以來追加

天皇住吉ノ行宮ニ崩ス、年四十一、後村上天皇ト稱ス、花營三

天皇住吉行宮ニ即位ス、大日本史

新田義宗、脇屋義治兵ヲ越後上野ニ起ス、喜連川

北朝足利義滿ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス、後醍醐

楠木正儀北朝ニ附ク、

楠木氏ノ兵正儀ヲ討ッ、花營三

京師地大ニ震フ、後深心院

應安三年庚戌
是歲
應安四年辛亥

改元和漢合運

菊地武光懷良親王ヲ奉シ兵ヲ鎮西ニ起ス花營三代記

三月十九日

京師地大ニ震フ攝政雜事記
北朝後光嚴帝位ヲ緒仁親王ニ讓ル之ヲ後圓融帝ト稱ス國位十一

三月廿三日

南朝楠木正儀ヲ討ツ細川頼元正儀ヲ救フ皇代畧記

八月

菊地武政今川貞世ヲ肥後ニ敗ル菊池武朝申狀

二月

改元和漢合運
天皇位ヲ皇太弟熙成親王ニ讓ル長慶天皇ト稱ス花營三代畧記

是歲

夏疾疫流行大衆院代記

後龜山天皇

在位十九年自年二千三十四年至二千五十二年文
中一先帝年號ニ仍ル改元三天授六弘和三元中九

應安七年寅甲

正月廿九日

後光嚴天皇崩皇胤紹運錄

是月

京師疱瘡流行皇代畧記

二月十六日

四條橋起工續皇居表

十二月五日

太政官廳立柱上棟續皇居表

是歲

改元和漢合運
御靈社火
征夷大將軍懷良親王大内義弘ト戰ヒ敗績ス菊地氏一族百餘人戰死ス後畧記

二月十八日

疾疫流行後畧記

七月

懷良親王今川貞世ヲ伐テ之ヲ破ル菊池武朝申狀

九月

足利義滿室町第ヲ營ミ花御所ト稱ス永和五年記

天授五年己未
天和四年戊午
天授三年丁巳
天授元年乙卯

是歲

天授六年庚申

六月廿四日

弘德元年辛酉

是歲

弘德二年壬戌

四月十一日

弘德三年癸亥

四月

十二月

至德元年甲子

是歲

元中八年辛未

天下大飢和漢合運

光明天皇崩ス皇胤紹運錄、皇年代畧記、

宗良親王新葉和歌集ヲ上ル新葉和歌集序
改元和漢合運

楠木正儀歸順河内通法寺文、齊和漢合運曆、

北朝後圓融院位ヲ太子幹仁ニ讓ル、是ヲ後小松天皇ト爲ス皇記、皇胤紹運錄、

地大震後愚昧記

權中納言藤原爲重新後拾遺和歌集ヲ上ル拾芥抄

改元和漢合運

十月十六日

十二月廿九日

是歲

元中三年壬申

閏十月二日

閏十月五日

京師地大震明徳記

山名氏清叛シ、兵ヲ以テ京師ニ入ル、義滿擊テ之ヲ内野ニ斬ル、
明徳記 事ハ第三篇ニ詳ナリ、

疾疫飢饉人多死常樂記、和漢合符、

足利義滿細川頼之ヲシテ和ヲ請ヒ、兩統交立ノ議ヲ獻ス、帝之
ヲ許シ、車駕京師ニ還リ、大覺寺ニ御ス、

天皇神器ヲ後小松帝ニ傳フ續神皇正統記

延元元年南北分裂ヨリ此ニ至ル五十七年ヲヘテ、皇統一ニ
歸シ、京師正統天皇ノ皇居トナレリ、事ハ第三篇ニ在リ、

平安通志卷之五十八

平安通志卷之五十九

湯本文彦等編

第四編

長曆

後小松天皇

在位二十年、自二千五十三年至二千七十二年、改元二、明徳一、應永十九、開位十年、永徳一、至徳三、嘉慶二、康應一、明徳三、

明徳四年

四月廿六日

後圓融上皇崩 公稱補任、

八月

洪水 皇代

應永元年 戊甲

二月廿三日

後龜山天皇ヲ尊シテ太上天皇ト曰フ、皇代

七月五日

改元 和漢合符

十一月六日

左大臣藤原經嗣ヲ以テ關白ト爲ス、公稱補任

十二月十七日

前左大臣足利義滿征夷大將軍ヲ罷ム、足利義持職ヲ襲ク、足利家傳

十二月廿五日

足利義滿太政大臣ト爲ル、公稱補任

應永二年 亥乙

四月廿九日

天皇太政大臣足利義滿室町第二行幸ス、足利家傳

應永四年

是 歲

應永五年

寅 戊

正月十三日

崇光上皇崩、
格業記、歷代皇紀、

三月九日

關白經嗣罷ム、前關白師嗣之ニ代ル、公卿補任

應永六年

卯 巳

四月十九日

關白師嗣罷、前關白經嗣之ニ代ル、公卿補任

十一月八日

足利義滿兵ヲ率井東寺ニ至リ、尋テ男山ニ軍シ、諸將ヲ遣リ大

内義弘ヲ界浦ニ撃テ、之ヲ斬ル、喜連川系圖

應永八年

己 辛

二月廿九日

土御門殿火アリ、天皇之ヲ足利義滿室町第二避ク、應永代皇紀、
應永代皇紀、
正統

七月四日

伏見殿火アリ、累代御記文書樂器悉ク亡フ、格業記

八月三日

足利義滿土御門殿ヲ造進ス、歷代皇紀、
和漢合符

是 歲

義滿僧祖阿商人肥富ヲ明ニ遣リ好ヲ通ス、格業記、
實記

應永九年

午 壬

十一月十九日

土御門殿成ル、天皇徙御ス、歷代皇紀、
社雜事記、
寺

應永十一年

申 甲

五月十二日

明使來聘ス、

此時明ノ燕王朱棣其君建文帝ヲ弑シテ自立ス、因テ書ヲ義滿ニ贈リ即位ヲ告ルナリ、

應永十二年

酉 乙

六月九日

祇園社鳥居倒ル、壓死二十餘人、和漢合符

應永十三年

戌 丙

八月廿五日

大風太政官廳顛倒ス、

應永十四年

亥 丁

十月十日

太政官廳造營上棟、建内記

應永十五年

子 戊

三月八日

天皇足利義滿ノ北山第二行幸シ、二十八日還御、北山行幸記、
東

事ハ第三篇ニ詳ナリ、

四月八日

關白經嗣罷ム、左大臣忠嗣ヲ以テ關白ト爲ス、公卿補任

五月六日

前太政大臣足利義滿薨ス、公卿補任、
格業記、

應永十六年 己丑

三月 四日

應永十七年 庚寅

十二月 晦

應永十九年 壬辰

六月 廿一日

稱光天皇

應永二十年 己巳

十二月 五日

應永廿一年 甲午

十二月 十九日

應永廿二年 乙未

十一月 廿一日

是 歲

應永廿三年 丙申

三 月

關白忠嗣罷ム、内大臣滿基之ニ代ル、

關白滿基薨ス、前關白經嗣之ニ代ル、公卿補任

南蠻使ヲ遣シテ朝貢ス、若州今當名領主次第

在位十六年、自二千七百十三年至二千八百十八年、改元二、應永十五、正長一、

天皇上皇ニ觀ス、駐蹕三日、皇年代

天皇太政官廳ニ即位ス、年十四歲、皇胤紹運、皇年代

大嘗祭、皇胤紹運、皇紀

太政官廳顛倒、建内

足利義嗣其兄義持ノ將軍職ヲ奪ハント欲ス、謀泄ル、髮ヲ削テ

六月 朔

十一月二十日

應永廿四年 丁酉

六月十九日

七月廿三日

應永廿五年 戊戌

正月廿五日

十二月二日

應永廿六年 己亥

二月 九日

二月十四日

八月十七日

十二月廿一日

是 歲

遁亡ス、鎌倉大草紙

土御門烏丸火アリ、上皇宮延燒ス、南方紀傳

榮仁親王薨ス、椿葉記

上皇宮成リ、徙御ス、皇紀、年立抄

天皇上皇ニ觀ス留ル七日、德大記、相國記

足利義持其弟義嗣ヲ殺ス、系圖、鎌倉大草紙

關白經嗣薨ス、右大臣滿教之ニ代ル、公卿補任

内大臣足利義持罷ム、公卿補任、官位記

大風、園韓神社倒ル、祭ヲ罷ム、康富記

祈年穀奉幣ヲ廢ス、看聞御記

豐受太神宮ヲ正殿ニ遷ス、神鏡記

是ヨリ先キ、蒙古高麗來リ寇ス、對馬西海ノ兵撃テ之ヲ却ク、

應永廿七年庚子

是歲

應永廿八年辛丑

正月二日

七月五日

是歲

應永三十年癸卯

二月十八日

三月

九月十日

應永三十一年甲辰

四月十二日

四月二十日

應永三十二年乙巳

三月廿七日

大旱琵琶湖水涸ル三町、淀川徒涉スヘシ、歲大飢、文正年間記、長祿年代記、

天皇上皇ニ觀ス、池部、

權大納言藤原兼良内大臣ト爲ル、公卿補任、年立抄、
大旱飢疫ス、道瑾相枕シ、死尸山ヲ成ス、皇代器記、文正年代記、

征夷大將軍足利義持罷ム、右近衛中將義量ヲ以テ職ヲ襲カシ

地屢震フ、文正年、同記

上皇足利義持室町ノ第二幸ス、花營三、代記

後龜山上皇崩ス、和漢、合運

關白滿教罷ム、左大臣持基之ニ代ル、公卿補任

征夷大將軍足利義量薨ス、義持復タ政ヲ執ル、右近衛、公卿補任、

應永三十三年丙午

正月五日

應永三十四年丁未

八月十四日

十月

正長元年戊申

正月十八日

四月廿七日

七月廿日

後花園天皇

正長元年戊申

七月廿八日

十月十五日

五條火、延テ二條ニ及フ、後數火アリ、燒亡凡一百餘町、如是院、年

太政官廳災ス、如是院、年、代、

赤松滿祐亂ヲ作ス、足利義持兵ヲ遣リ之ヲ討ツ、既ニシテ罪ヲ免シ、京ニ歸ラシム、赤松、系圖

前征夷大將軍内大臣足利義持薨ス、官位、

收元、公卿補任、年、代、
天皇土御門殿黑戸ニ崩ス、年廿八、紹運、年、

嗣ナシ、足利義持崇光院ノ曾孫彦仁ヲ迎ヘ、之ヲ立ツ、
在位、册六年、自二千八百八十九年至二千九百廿四年、收元八、永享十二、嘉吉三、文安五、寶徳三、享徳三、康正二、長祿三、寛正六、

天皇前右大臣藤原公光土御門高倉第二踐阼ス、時二年十歲、關

白持基攝政、皇胤、紹運、公、
太政官廳災ス、

十月廿二日
是 歲

永享元年 己酉

太政官木造始建内記
後龜山上皇ノ皇子小倉宮兩統交立ノ約ニ背クヲ以テ北畠滿雅ニ頼リ兵ヲ舉ク成ラヌシテ復タ小倉ニ還ル格葉記

三月十五日

足利義宣後義教ト改ムヲ以テ征夷大將軍ト爲ス薩永記

八月廿九日

高倉第ヨリ土御門殿ニ遷御ス

九月五日

改元年代

十二月廿七日

天皇太政官廳ニ即位ス天祥禮記
足利義教楠木正光ヲ捕ヘ之ヲ斬ル君聞御記

永享二年 庚戌

十一月十四日

太政官廳ニ遷御ス格葉記

十一月十八日

大嘗ヲ以テ八省院回立殿ニ幸シ官廳還御ノ後正廳ニ宴會ス廣審記

永享四年

八月十三日

攝政持基罷ム左大臣藤原兼良ヲ以テ攝政トス

十月廿七日

攝政兼良罷ム前攝政持基ヲ以テ攝政セシム公卿補任

永享五年 癸丑

六月

延曆寺僧徒日吉神輿ヲ奉シテ京ニ入ル將軍義教兵ヲ遣テ之ヲ禦ク永祿年代記

九月

地屢震ス止サルコト二旬餘南方紀傳

十月廿日

後小松上皇崩ス升遐記

是 歲

明使來聘如是院年記

永享六年 甲寅

二月十一日

京師火アリ因幡堂萬壽寺ニ延燒シ七條ニ至ル燒亡一萬餘家如是院年代記
記、南方紀傳

五月晦

將軍義教ノ請ニヨリ賀茂競馬ヲ行フ

六月朔

明使京ニ入ル乘輿五人騎馬千二三百人

十月四日

延曆寺衆徒神輿ヲ奉シテ京ニ入ル將軍義教兵ヲ遣リ之ヲ防

是 歲

疫癘死者多シ南方紀傳

永享七年 乙卯

二月四日

延曆寺及ヒ五山ノ僧法ヲ犯ス者數十人ヲ捕ヘテ六條磔ニ斬

ル、如是院年代記、
文正年代記、
八阪塔災ス、南方紀傳

十一月廿九日
永享九年己丁

十月廿一日

天皇足利義教ノ室町第二幸シ、文人ヲ召シ、題ヲ賜ヒ、詩歌ヲ作
ラシム、留ルユト五日宮ニ還ル、室町行幸記、永享行幸記、

永享十年午戊

八月廿三日

權中納言藤原雅世新續古今和歌集ヲ上ル、宜胤記、新續古今序、

永享十一年未巳

正月

將軍義教鎌倉管領足利持氏ヲ討ス、持氏自殺ス、鎌倉公卿補任、大草紙、

四月

足利基氏關東ヲ總督セシヨリ、四世九十年、是ニ至テ亡フ、持
氏二子春王安王逃テ下野ニ赴キ、結城氏朝ニ投シ、兵ヲ起ス、

嘉吉元年酉辛

嘉吉元年、將軍義教京軍及ヒ關東ノ兵ヲ發シテ、結城ヲ攻メ
之ヲ陷ル、氏朝父子戰死、春王安王ヲ擒ニシテ之ヲ斬ル、

二月廿七日

八阪塔ヲ造ル、南方紀傳

改元、公卿補任、公名記、

嘉吉元年酉辛

盜内侍所ノ鈴ヲ盗ム、更ニ諸門ヲ戒嚴ス、建内記

四月二日

頃年偷盜屢宮中ニ入り、宿衛廢弛捕獲スルコト能ハス、

五月廿日

洪水、鴨河四條五條橋流失ス、公名記

六月六日

大風、太政官廳西廊顛倒ス、建内記

六月廿四日

赤松滿祐將軍足利義教ヲ其第西洞院ニ邀テ之ヲ弑シ、自ラ第
ヲ燒テ播磨ニ走ル、公卿補任、嘉吉記、

九月十日

赤松滿祐父子誅ニ伏ス、公名記、嘉吉記、

閏九月

京師市民私黨ヲ結ヒ、洛中洛外社寺ニ據リ、德政ヲ強請ス、建内記

嘉吉二年戌壬

足利義勝ヲ以テ征夷大將軍トナス、時二年八歳、官位記、康富記、

嘉吉三年亥癸

押小路火アリ、延テ三條坊門ニ及フ、公名記

二月十九日

將軍足利義勝薨ス、同母弟義政ヲ以テ嗣トナス、時二年八歳、足利

七月廿一日

家譜、足利官位記、

九月廿四日

日野有光南朝ノ皇孫ヲ奉シ皇居ヲ襲フ、天皇俄ニ近衛前關白

九月廿五日

十二月十三日

是歲

文安元年甲子

二月五日

四月十二日

六月

文安三年丙寅

正月廿九日

六月十五日

第二避少、南黨神器ヲ奪ヒ火ヲ放ツ、皇居焼亡ス、天皇伏見殿ニ遷御ス、看聞御記、

官軍之ヲ叡山ニ伐ツ、有光自殺ス、劍鏡關ニ還リ、神璽ハ南黨之ヲ南山ニ奉ス、般神皇正統記、事ハ第三編ニ詳ナリ、

皇居ヲ造ル、祇園社巫女ノ語ニ從フナリ、文正年代記、對馬島主宗貞盛朝鮮ト互市ヲ約ス、是ヨリ交易絶エス、每歲船五十艘ヲ定額ト爲ス、和漢合運、海東諸國記、

收元、公卿補任、如延元年代記、

西京商人北野社ニヨリ事ヲ訟フ、幕府之ヲ捕フ、其徒火ヲ放テ自殺ス、社殿及ヒ人家延燒ス、如是院年代記

南兵義有王、國滿院ヲ擁シ神璽ヲ奉シ兵ヲ大和紀伊ニ起ス、南傳記

前關白左大臣兼良太政大臣トナル、公卿補任、

太政大臣兼良ヲ以テ關白トナス、公卿補任、

是冬

文安四年丁卯

是秋

十一月

文安五年戊辰

是歲

寶徳元年己巳

五月三日

七月廿八日

寶徳二年庚午

正月

四月廿八日

七月十九日

十月十八日

畠山基國兵ヲ遣リ、紀伊北山ヲ攻メテ、義有王ヲ獲、康富記、諸門跡譜、

土一揆兵ヲ起シ、德政ヲ唱フ、文正年代記

無品親王貞成ヲ尊テ太上天皇ト曰フ、康富記

四月ヨリ六月ニ至リ、地數大ニ震フ、且ツ七月洪水、五條勢多橋壞レ、人多ク溺死ス、文正年代記、

左馬頭足利義成後義政ト改ムヲ以テ征夷大將軍トナス、足利官位記、康富記、

收元、公卿補任、如延元年代記、

京師疾疫、七月ニ至ルマテ最甚シク、死者日ニ千餘人、南方記、

關白兼良太政大臣ヲ罷ム、公卿補任、

修驗道士事ヲ以テ細川勝久ヲ恨ミ、神輿ヲ奉シテ其綾小路ノ

第ヲ攻ントス、京師騷動ス、康富記

四條橋ヲ造ル、歷代皇記、改曆事記、

寶德三年 未辛

七月

享德元年 申壬

七月廿五日

是歲

享德二年 酉癸

四月廿八日

享德三年 戌甲

八月廿一日

九月八日

十一月二日

康正元年 乙亥

康正元年 乙亥

六月二日

七月廿五日

是夏

琉球來聘ス、足利將軍家贈

改元、康富

痘瘡流行、小兒多ク死ス、如是院年代記

關白兼良罷ム、右大臣持通之ニ代ル、公卿補任

畠山德本山名宗全ト相争フ、輦下騷動、山名教之、細川成之、等四門ヲ警衛ス、康富

京師盜起リ、鐘ヲ鳴ラシ、德政ヲ私唱ス、臥雲日什錄、文正年代記

關白房平罷ム、前關白持通之ニ代ル、

改元、公卿補任

興福寺ノ僧徒神木ヲ奉シテ京師ニ入ル、細川勝元諭シテ之ヲ

却ク、實錄

畠山義就春日ノ神田ヲ侵掠シ、幕府制スル能ハサルヲ以テナリ、

康正二年 子丙

四月十一日

七月廿日

八月

九月廿二日

長祿元年 丑丁

八月廿八日

十一月

長祿二年 寅戊

八月 晦

土御門内裏立柱上棟、皇代記

天皇新造皇宮ニ遷御ス、如是院年代記

後崇光法皇崩ス、皇代記

太神宮正殿荒廢ノ事ヲ軒廊ニトス、康富

改元、公卿補任

土一揆蜂起、皇代記

神璽吉野ヨリ還御ス、上月記、殘櫻記

赤松ノ遺臣偽テ南朝ニ降り、尊秀忠義ニ皇子ヲ戕ヒ、神璽ヲ取り奉還セシナリ、

關白持通罷ム、左大將教房之ニ代ル、公卿補任

寛正元年 庚辰

三月

十二月廿一日

楠氏ノ族吉野ニ在ル者ヲ捕ヘ、悉ク之ヲ四塚ニ殺ス、季瓊日録

將軍義政大ニ第宅ヲ營ム、靡麗ヲ極ム、人民役ニ苦ム、天皇御製

ノ詩ヲ賜テ之ヲ規ス、長藤寛正記

大ニ飢ウ、餓卒路ニ盈ツ、京師叢塚數十所ヲ爲リテ之ヲ瘞埋ス

寛正二年 辛巳

三月廿九日

建仁寺及ヒ六角堂等諸所ニ於テ食ヲ貧民ニ施ス、

去冬ヨリ疫疾大ニ行レ、頻年凶荒、諸道ノ人民食ニ京師ニ就

ク、米粟支ヘス、尸骸巷ニ盈ツ、因テ施餓鬼ヲ四條五條橋ニ修

ム、如是院年代記

寛正三年 壬午

九月十一日

土一揆蜂起ス、

十一月

一揆ノ魁首蓮田兵衛ヲ捕ヘテ之ヲ斬リ、首ヲ四塚ニ梟ス、長藤寛正記

寛正五年 甲申

七月十九日

天皇位ヲ成仁親王ニ讓ル、國史實錄、皇祖運錄

十二月

近江人熊谷某世ノ將ニ亂レントスルヲ知リ、上書シテ時弊

ヲ言フ、義政怒テ其采邑ヲ奪フ、

後土御門天皇

在位册六年、自二千五百廿五年至二千五百六十年、寛正一、先帝年號ニ仍ル、改元六、文正一、應仁二、文明十八、長享二、延徳三、明應二、九、

寛正六年 乙酉

十二月廿八日

天皇太政官廳ニ即位ス、公卿補任、皇祖運錄、應仁、皇年代略記

是レ即位大禮ノ太政官廳ニテ行ハレシ終リナリ、未タ幾年

ナラスシテ、應仁ノ亂アリ、太政官モ永ク荒墟トナレリ、

文正元年 丙戌

三月廿八日

改元、

應仁元年 丁亥

正月十八日

畠山政長其族義就ト御靈林ニ戰フ、天皇俄ニ亂ヲ足利義政室

町第二避ク、政長敗走ス、應仁記

改元、

三月五日

關白持通罷ム、前關白兼良之ニ代ル、公卿補任

五月十日

細川勝元將軍義政ヲ擁シ、兵ヲ集メ室町第二據リ、山名宗全亦

五月廿六日

兵ヲ集メ其邸ニ據ル勝元實相院ヲ取ル西軍敗レ走ル、
東西兩軍血戰晝夜ヲ連ヌ死尸堀川ヲ填ム草堂以下巨剎多ク
火ス、

六月 朔

東西兩軍渥ヲ一條大路ニ穿テ相拒ク、
東軍一色氏第ヲ燒ク延袤十八町ニ及フ此ヨリ屢兵ヲ交ヘ兵
燹殆ト虚日ナシ、

八月廿三日

勝元義政ニ逼テ近臣十二人ヲ逐フ、
勝元俄ニ天皇上皇ヲ室町第二迎ヘ別ニ人ヲ遣ハシ皇居ヲ守
ラシム、
別記

九月 朔

西軍三寶院ヲ取り諸邸第ヲ燒ク、
淨華院其他邸第火ク、

九月十三日

西軍大舉シテ相國寺ヲ取ル、
東軍畠山政長ヲシテ相國寺ヲ復セシム、
之ヲ應仁ノ亂トス事ハ第三編ニ詳ナリ、
別記

十月三日

天皇上帝足利義政室町第二在リ歌ヲ詠シテ世ヲ慨ス、
池菰

十月五日

應仁二年 子戊

十月

東軍足利義親ヲ出シテ叡山ニ登ラシム西軍迎テ之ヲ奉シ義
政ト相爭フ、
別記

文明元年 丑己

四月廿八日

改元

文明二年 寅庚

八月十日

關白兼良罷ム左大臣政嗣之ニ代ル、
相國寺大塔火ス塔ハ應仁ノ兵火ヲ免カレシカ此ニ及ヒ烏有
トナレリ、
親長

十二月廿七日

後花園法皇足利氏室町第二崩ス、

文明三年 卯辛

正月三日

後花園帝ヲ悲田院ニ葬ル泉涌寺西軍ニ屬シ葬ルヲ得サルヲ
以テナリ、
應仁

文明四年 辰壬

三月 晦

天皇時勢ヲ慨シ落髮セント欲ス足利義政諫テ之ヲ止ム、

文明五年 巳癸

二月廿二日

内侍所成ル、
親長

三月
五月

山名宗全死ス、
細川勝元死ス、應仁記

勝元宗全相繼キ死スレトモ、兩軍ハ猶相持シテ決セス、京師益、荒殘ス、

十二月十九日
文明七年乙未

正月 朔

足利義政征夷大將軍ヲ辭ス、其子義尚ヲ以テ之ニ代フ、
室町假皇居ニ於テ四方拜ヲ行フ、親長記

二月 廿日

應仁以降朝典悉ク廢シ、是ニ至リテ之ヲ行宮ニ行フ、
安樂院火アリ、延燒數百戸、親長記、長興記、

八月 六日

鳴川洪水、宮垣ヲ浸ス、長興記、
義政使ヲ明ニ遣シテ、書籍及ヒ銅錢ヲ求ム、京華集、善隣國寶記、

是 月
文明八年丙申

五月 十五日

左大臣政基ヲ以テ關白ト爲ス、公卿補任

八月 廿三日

賀茂社司氏人等互ニ私鬪ヲ作シ社殿ヲ燒ク、親長記

十一月 十三日

室町假皇居火アリ、帝義政ノ小川第ニ幸ス、後北小路第ニ徙御ス、皇胤紹運錄、永享行幸記、

文明九年丁酉

正月 十八日

是時朝廷歷代ノ典籍寶貨御物等皆蕩盡ス、

十月 廿日

武田國信ノ兵赤松政則ノ兵ト官前ニ戰ヒ、將ニ火ヲ官關ニ放
タントス、中外騷擾ス、親長記、御湯殿上日記、
内侍所安鎮祭ヲ行フ、吉田兼俱資用ヲ獻ス、位一級ヲ進ム、親長記

土岐成賴義視ヲ奉シテ美濃ニ奔ル、東西兩軍各解キ其國ニ歸
ル、應仁已後十一年間、兵革相踵ク、是ニ至テ兩軍始テ散シ、京師
荒殘ス、應仁記

文明十一年己亥

二月 晦

關白政基罷ム、右大臣政家之ニ代ル、公卿補任

七月 朔

北小路行宮火アリ、天皇侍從藤原政資ノ第ニ徙御ス、親長記、皇胤紹運錄、

十二月 七日

車駕土御門宮ニ還御ス、皇胤紹運錄、如應仁元年代記、
應仁元年亂ヲ避ケ室町幕府ニ幸セシヨリ、此ニ及ヒ十二年
ニシテ皇居ニ還ルヲ得タリ、

是 歲

文明十二年庚子

京師火屢起ル、

九月十一日
十月十日

土一揆起ル、京中ヲ掠メ、公卿第宅ニ侵入ス、廿二日ニ至テ散ス、
土一揆復起ル、北白川ニ屯シ、七口新關ヲ毀ツ、行旅以テ便トナ
ス、

十二月十四日

卜部兼俱日本紀ヲ進講シ、從二位ニ進メラル、

文明十三年辛丑

前關白兼良薨ス、年八十、宣胤

四月二日

文明十五年癸卯

關白政家罷ム、左大臣政平之ニ代ル、公卿補任
義政宅ヲ東山ニ造リ、東山殿ト號シ、世之ヲ銀閣ト稱ス、京師集、足利將

七月

將軍

文明十六年甲辰

土一揆復起ル、東寺ニ據ル、細川政元伐テ之ヲ平ク、

十一月四日

大風、禁關北門倒ル、諸第民家モ多ク倒ル、親長記

是歲

土一揆起リ、火ヲ放テ東寺ニ據ル、連年土一揆京中ノ典舖倉庫
ヲ毀テ、或ハ公卿第宅ヲ侵シ、德政ヲ私唱ス、親長記、如是院年代記

長享元年丁未

二月九日

關白政平罷ム、政忠之ニ代ル、公卿補任

長享二年戊申

七月廿日

改元、親長記
關白政忠薨ス、内大臣冬良之ニ代ル、親長記

八月廿八日

皇太神宮ヲ修ム、
神人黨ヲ結ヒ亂ヲ爲シ、火ヲ放テ宮ヲ燒クヲ以テナリ、伊勢内宮

延徳元年巳酉

三月廿六日

足利義熙薨ス、公卿補任、足利官位記
改元、親長記、兼赤記

延徳二年庚戌

八月廿一日

足利義政薨ス、足利官位記、親長記
土一揆北野社ニ據リ、德政ヲ唱フ、十九日幕府之ヲ擊ツ、一揆火
ヲ放テ北野社ヲ焚ク、親長記

正月七日

足利義植ヲ以テ征夷大將軍トナス、足利官位記、親長記

三月十七日

七月五日

延德三年 亥辛

正月

八月廿二日

明應元年 子壬

七月十九日

是秋

明應二年 丑癸

二月廿八日

四月廿三日

明應三年 寅甲

七月 六日

十二月廿七日

明應六年 巳丁

六月 七日

足利義視薨ス、親長記

將軍義材六角高頼ヲ近江ニ征ス、親長記

改元、宣胤記、拾芥記

京都盜賊公行、將軍義植ヲ近江ヨリ召回シテ警衛セシム、池藻解

關白冬良罷ム、右大臣尙通之ニ代ル、公卿補任

將軍義植畠山義豐ヲ河内ニ征ス、義豐襲撃シテ義植ヲ虜ニシ、畠山政長ヲ殺ス、足利官位記、足利系譜記

四條火起リ、下京六十六町ヲ延焼ス、和長記、殿助記

足利義高後義ヲ以テ征夷大將軍トナス、足利官位記、和長記

關白尙通罷ム、右大臣尙基之ニ代ル、十月尙基薨ス、前關白再之ニ補ス、公卿補任

明應九年 申庚

六月

七月廿八日

九月廿八日

後栢原天皇

明應九年 申庚

十月廿五日

文龜元年 酉辛

二月廿九日

四月十九日

四月廿九日

六月廿九日

文龜二年 戌壬

正月 朔

祇園會ヲ復ス、殿助記

柳原火起リ、一百餘町ヲ延焼ス、公卿以下ノ第宅二萬餘家文書貨財多ク蕩盡ス、和長記、殿助記

天皇土御門殿ニ崩ス、十一月ニ至テ之ヲ葬ル、明應凶事記、宣胤記、在位二十六年、自二千六百六十一年至二千六百八十六年、改元三、文龜三、永正十七、大永七、

天皇小御所ニ踐阼ス、皇胤紹運錄、拾芥記

改元、公卿補任

賀茂祭ヲ復ス、

勅シテ正殿造管山陵奉幣使等ノ事ヲ廷議セシム、和長記

應仁以來官司諸廳儀盡ク廢缺スルヲ以テナリ、

關白冬良罷ム、右大臣尙經之ニ代ル、公卿補任

九月七日

祇園祭ヲ復ス、拾芥記

永正元年甲子

二月廿四日

春日祭ヲ復ス、宣胤記、散狀留、

二月晦

改元、公卿補任、拾芥記、

九月七日

土一揆亂ヲ爲ス、士民宮垣中ニ避ク、幕府命シテ德政ヲ行フ、侵掠益甚シ、宣胤記

永正五年戊辰

二月二日

土一揆起リテ中京ヲ燬ク、元長記

三月十六日

將軍義澄近江ニ奔ル、足利官位記、嚴助記、

四月

京師流言アリ、士民資財ヲ東西ニ輸シ騷擾ス、元長記

六月九日

大内義興足利義植ヲ擁シ京師ニ入ル、詔シテ征夷大將軍義澄ノ官爵ヲ削ル、足利季世記

八月七日

地大震フ、拾芥記

永正七年庚午

是歲

對馬守宗義盛子盛弘ヲ遣リ朝鮮ヲ撃テ、二城ヲ拔キ進テ熊川ニ戰死ス、宗系圖

永正八年辛未

足利義澄薨ス、足利官位記

永正十四年丁丑

大内義興國ニ歸ル、公卿多ク之ニ從フ、國史實錄

八月

永正十七年庚辰

細川高國三好長輝ヲ智恩寺ニ攻ム、長輝自殺ス、元長記

五月五日

大永元年辛巳

天皇紫宸殿ニ即位ス、年五十八、皇胤紹運錄、拾芥記、

三月廿二日

帝踐阼以來廿餘年ヲ經ルモ、費用ナキヲ以テ大禮ヲ學ル能ハス、三條西實隆等諸方ニ説キ、經費ヲ奉セシメ、因テ之ヲ行フヲ得タリ、

將軍足利義植淡路ニ奔ル、足利季世記

三月

義植細川高國ト隙アルヲ以テナリ、是ニ於テ義澄ノ子義晴ヲ播磨ニ迎テ之ヲ立ツ、時ニ年十一、和長記

改元、皆別記、宣胤記、

八月廿三日

左馬頭足利義晴ヲ以テ征夷大將軍トナス、足利官位記、二水記、

十二月廿五日

大永六年 丙戌

四月 七日

天皇小御所ニ崩ス、公卿補任、
在位册一、自二千八百八十七年至二千二百三十七年、大永一先帝年號ニ仍ル、改元三、享祿四、天文廿三、弘治三、

大永六年

四月 廿九日

天皇踐阼、二水記

大永七年 丁亥

二月 十三日

三好長基等將軍義晴ヲ攻ム、義晴近江ニ走ル、此ヨリ連年戰爭
息マス、二水記

享祿元年 戊子

十二月

將軍義晴土一揆ニ迫ラレ、德政ノ令ヲ發ス、殿助記

八月 廿日

改元、公卿補任、二水記

天文元年 壬辰

九月 八日

三好長基京師ヲ犯ス、將軍義晴近江ニ奔ル、皇年代畧記、朽木家傳、

天文二年 癸巳

七月 廿九日

改元、公卿補任、官繼記、

天文三年 甲午

二月 五日

關白植家罷ム、内大臣植通之ニ代ル、公卿補任

天文四年 乙未

二月 六日

疫行レ、死者多シ、公卿補任

六月 三日

大風雨、日華門倒ル、官繼記

八月 廿九日

日華門木造始アリ、且ツ即位ノ爲メ内裏ヲ修理ス、

天文五年 丙申

二月 廿六日

天皇紫宸殿ニ即位ス、公卿補任、皇年代畧記、

七月 廿三日

踐阼後已ニ十年ヲ經タリ、是歲大内義隆資用ヲ奉シ、始テ大
禮ヲ學ルコトヲ得タリ、

延暦寺衆徒京師ニ入り、日蓮宗二十一寺ヲ燬キ、三千餘人ヲ斬

獲ス、市街延焼算ナシ、殿助記、足利季世記、

幕府ニ詔シテ日蓮宗徒ヲ攘斥セシム、足利

前内大臣藤原實隆薨ス、藤原氏系圖

是 歲

天文十一年 壬寅 十月 三日

天文六年 丁酉

天文十一年 壬寅

天文十一年 壬寅

二月廿五日
天文十三年 辰甲

關白植家罷ム、左大臣忠冬之ニ代ル、公卿補任

七月九日

洪水アリ、四條五條橋流失、皇宮ニ及ヒ西垣門墻壞ル、幕府兵ヲ出シ警戒ス、年代記

天文十四年 巳乙

關白忠冬罷ム、左大臣房通之ニ代ル、公卿補任

六月二日

土一揆起リ、輦下騷擾、幕府兵ヲ發シテ四門ヲ衛リ、德政ヲ揭示ス、御浴殿上日記

天文十五年 午丙

土一揆關ヲ犯シテ、幕府ノ秕政ヲ愬フ、幕兵擊テ之ヲ却ク、殿助記足利義晴大將軍ヲ辭ス、其子左馬頭義藤ト改ムヲ以テ征夷大將軍ト爲ス、公卿補任、御浴殿上日記

十一月

天皇足利義藤室町ノ第二幸ス、新續古事記、清生文武記

十二月廿日

足利義藤其父義晴ト細川晴元ヲ東山ニ討ツ、克タス、近江東坂本ニ走ル、公卿補任、足利季世記

天文十六年 未丁

二月廿五日

三好長慶京師ニ入り焚掠ス、足利季世記

七月十九日

將軍義藤父子京師ニ還ル、公卿補任、足利將軍家譜

六月七日

關白房通罷ム、左大臣晴良之ニ代ル、公卿補任

十二月廿七日

足利義輝大内陣外北方總門築地釘拔等ヲ修理ス、

天文十七年 申戊

細川晴元三好長慶ト戦ヒ、大ニ敗ル、將軍義藤父子ヲ擁シテ坂本ニ奔ル、國史實錄

四月十七日

足利義晴坂本ニ薨ス、公卿補任

五月四日

三好長慶京中ニ課シテ、地子錢ヲ收ム、國史實錄

天文二十年 亥辛

細川晴元ノ黨長慶ノ黨ト戦ヒ、相國寺火ス、

三月

將軍義藤京師ニ還ル、殿助記

七月十四日

天文廿一年 子壬

正月廿八日

天文廿二年 丑癸

正月廿二日
弘治元年 卯乙

關白晴良罷ム、右大臣兼冬之ニ代ル、官繼

二月廿二日
弘治元年 卯乙

皇太神宮修理ノ事ヲ議ス、山入祭木造始等ノ事ヲ定ム、公卿補任
改元、和寧始

十月廿三日
弘治二年 辰丙

三好長慶奏請シテ宮闕ヲ修補シ、戸稅ヲ征シテ費用ニ給ス、

十月
弘治三年 巳丁

上京火、四百餘家ヲ延燒ス、殿助記

四月廿八日

九月二日

十月廿七日

正親町天皇
在位廿九年、自二千二百十八年至二千二百四十六年、改元三、永祿十二、元龜三、天正十四、

天皇崩ス、年六十二、公卿補任、皇胤紹運錄
正親町天皇土御門殿ニ踐阼ス、御浴殿上日記、皇年代畧記
後奈良帝崩御ノ時、未タ立太子アラサルヲ以テ、皇子方仁親王直ニ踐阼アリシナリ、

弘治三年 巳丁

十月廿七日

永祿元年 午戊

天皇踐阼ス、御湯殿上日記、皇年代畧記

二月廿八日

五月二日

六月八日

永祿二年 未巳

正月 朔

十一月十二日

改元、御湯殿上日記

三好長慶松永久秀亂ヲ作シ、將軍義輝近江ニ走ル、

三好黨如意岳城ヲ陷ル、殿助記

四方拜行ハル、公卿補任

天皇即位式ヲ行ハントスルヲ以テ、神祇官ノ舊址ニ假殿ヲ設

ケ、伊勢太神宮奉幣使發遣ノ事アリ、中原康雄記

此時神祇官ハ巳ニ荒廢シ、唯八神殿ノミ存スレト、猶舊儀ヲ失ハス、假殿ヲ設ケ此式ヲ行ハレシナリ、

永祿三年 申庚

正月廿七日

天皇紫宸殿ニ即位ス、公卿補任、言繼記、御湯殿上日記

此時喪亂日久ク、京師荒殘、供御乏絶シ、大禮久シク擧ラス、此ニ及ヒ漸ク其資ヲ得テ之ヲ行ハレシナリ、

永祿五年 戌壬

二月廿七日

三好長慶佐々木承禎ト京師ヲ争フ、將軍義輝八幡ニ走ル、京師擾亂、佐々木承禎兵ヲシテ宮門ヲ守ラシム、御湯殿上日記、殿助記

永祿六年 亥癸

九月廿三日

豐受太神宮正殿遷御ノ式ヲ行フ、公卿補任

永享六年ヨリ中絶セシヲ百三十年ヲ經テ再興アリシナリ、

近江坂本土一揆德政ヲ唱ヘ亂ヲナス、殿助記

永祿七年 子甲

十一月十二日

立入宗繼ノ密奏ニ依リ、密旨ヲ織田信長ニ賜フ、事第三編ニ詳

ナリ、立入直頼記〇、關原記ニハ五年十一月トス、然レトモ立入氏ノ
正トス、ヘレ、宗繼ノ案ヲ繼キシハ其十二月ナレハ、直頼記ヲ

永祿八年 丑乙

五月十九日

三好義繼松永久秀兵ヲ以テ將軍義輝ヲ武衛陣第二弑ス、足利
季世

記、室町
殿日記

永祿十一年 辰戊

二月八日

足利義榮ヲ以テ將軍ト爲ス、九月薨ス、公卿補任

九月廿六日

織田信長足利義昭ヲ奉シ京師ニ入ル、信長記 事ハ第三編ニ詳ナ

十月十八日

義昭ヲ以テ將軍ト爲ス、公卿補任、御
湯殿上日記

永祿十二年 巳己

正月五日

三好黨將軍義昭ヲ本國寺ニ襲フ、御湯殿
上日記

四月

織田信長武衛陣第ヲ經營シ、將軍義昭ヲ居ク、

是 歲

織田信長村井貞勝僧日乘ニ命シ皇居ヲ修造セシム、室町殿日
記、信長記

元龜元年 午庚

四月廿三日

改元、公卿補任

九月十二日

織田信長延曆寺ヲ燒ク、信長記

元龜二年 未辛

是 歲

皇居紫宸清涼諸殿等修造成ル、又丹波國山國御料ヲ復シ、且ツ

米ヲ市民ニ貸シ、息ヲ納メテ供御ニ充テ、轉退ノ公卿ヲ復シ、更

ニ領地ヲ附ス、此ニ於テ皇居修造、公家相續御料ノ事皆其緒ニ

就ケリ、室町殿日
記、信長記、事ハ第三編ニ詳ナリ、

天正元年 酉癸

四月

京師大火、一百二十八所ニ及フ、公卿補任

七月三日

將軍義昭信長ト隙アリ、信長兵ヲ將テ京師ニ入ル、義昭走テ槇島

ニ據ル、攻メテ之レヲ陷レ、義昭ヲ河内若江ニ放ツ、公卿補任、
信長記

足利氏此ニ及ヒ覇業ヲ失ヒ、織田氏之ニ代リテ京師ノ政ヲ
執レリ、事ハ第三編ニ詳ナリ、

改元公卿補任

七月廿八日

信長朝倉氏ヲ滅ス、

八月廿日

信長淺井氏ヲ滅ス、

九月朔

信長三好義繼ヲ滅ス、信長記

天正二年戊甲

十一月

信長入朝從三位參議ニ叙任ス、公卿補任

是 歲

信長京師ノ地子ヲ除キ、徭役ヲ省キ、流氓ヲ招キ、大ニ市民ヲ綏
撫シ、又道路ヲ修メ、關門ヲ廢シ、以テ四方ノ交通ヲ便ニス、

天正三年亥乙

五月廿一日

信長大ニ武田勝頼ヲ長篠ニ破ル、信長記

七月

信長入朝ス、便殿ニ宴シ、盃ヲ賜フ、詔シテ其官爵ヲ進ム、辭シテ
受ケス、其功臣ヲ奏シテ官爵ヲ受ク、此時羽柴秀吉從五位下筑
前守ニ叙任ス、信長記、總見記

十一月

信長ヲ以テ權大納言右近衛大將ニ任ス、公卿補任

是 歲

信長村井貞勝ニ命シ、京都市民ヲシテ皇居周垣ヲ築カシム、

天正四年子丙

二月

信長大ニ安土ニ城ク、信長記

十一月廿一日

信長内大臣ニ任ス、

天正五年丑丁

十一月廿日

信長右大臣ニ任ス、公卿補任

是 歲

信長羽柴秀吉ニ命シ、中國ヲ伐ツ

天正六年寅戊

正月朔

諸節會ヲ復ス、信長記

是ヨリ先キ兵亂相繼キ、正朔ノ儀行ハレサル久シ、武井夕庵
其再興ヲ信長ニ勸ム、此ニ及ヒ信長奏シテ之ヲ行フ、

天正七年卯巳

十一月廿二日

信長二條殿ヲ修造シ、之ヲ誠仁親王ニ奉ス、此日親王儀仗ヲ備

テ之ニ移ル、之ヲ二條新御所ト稱ス、信長記、老入雜話

天正八年辰庚

正月

羽柴秀吉三木城ヲ陷ル、信長記、太閤記

三月 朔

是ヨリ先キ信長本願寺ト兵ヲ交ヘ、連年解ケス、此ニ及ヒ勅使ヲ遣ハシ諭シテ和ヲ講シ、大阪石山城ヲ信長ニ致サシム信長記

天正九年 巳辛

二月廿八日

信長皇居ノ東ニ於テ大馬揃ヲナシ、天覽ニ供ス、御湯殿上日記、信長記、四教史、

天正十年 午壬

三月

信長大舉、武田勝頼ヲ伐ケ之ヲ滅シ、甲信二州ヲ平ク、

五月廿九日

信長京師ニ入り、本能寺ニ館ス、信長記

六月 二日

明智光秀信長ヲ本能寺ニ弑ス、信忠誠仁親王ヲ禁中ニ奉シ、二條新御所ニ據リ、火ヲ放テ自刃ス、公卿補任、信長記、太閤記、老人雜話、事ハ第三編ニ詳ナリ、

六月十三日

羽柴秀吉明智光秀ヲ討シ之ヲ誅ス、豐臣秀吉、太閤記、事ハ第三編ニ詳ナリ、

十月

羽柴秀吉信長ノ葬事ヲ大徳寺ニ行フ、詔シテ正一位太政大臣ヲ贈ル、大徳寺、古文書

天正十一年 未癸

四月廿一日

羽柴秀吉大ニ柴田勝家ヲ破ル、廿四日北莊ヲ陷ル、柴田氏亡フ、太閤記

五月

秀吉入朝從四位下參議ニ叙任ス、公卿補任

是 冬

秀吉前田玄以ヲ所司代トナシ、京師ノ政ヲ掌ラシム、
秀吉大坂城ヲ築ク、太閤記、豐臣

天正十二年 申甲

正月 五日

皇孫和仁ヲ立テ親王トナス、御湯殿上日記、豊年代略記、

三 月

秀吉北畠信雄徳川家康ト小牧ニ相拒ク、

四 月 六日

徳川家康池田信輝ト長湫ニ戦テ之ヲ斬ル、

十二 月

秀吉信雄家康ト和ス、太閤記

天正十三年 酉乙

三 月 十日

秀吉ヲ正二位内大臣ニ叙任ス、禪讓アラントスルヲ以テ仙洞ヲ營シ、前田玄以役ヲ董ス、公卿補任、太閤記、

是 月

秀吉根來ヲ平ク、

五 月

秀吉長曾我部元親ヲ降シ、四國ヲ平ク、太閤記

七 月 十一日

關白昭實罷ム、内大臣秀吉ヲ關白トシ、從一位ニ叙ス、公卿補任

十月十三日

此時大ニ儀衛ヲ備ヘ、入覲恩ヲ謝シ、奏請シテ子弟功臣ヲ叙任シ、大ニ金銀ヲ頒與ス、伊勢皇太神宮正殿遷宮式ヲ行フ、寛正三年ヨリ此ニ及ヒ百廿四年ヲ經タリ、日誌初メ天武帝ノ時廿年改造ノ式ヲ定ム、足利氏以來此典廢絶ス、織田信長奏請之ヲ中興セシナリ、

天正十四年 戊酉

七月廿四日

十一月七日

後陽成天皇

天正十四年 戊酉

十一月廿五日

十二月十九日

是 歲

天正十五年 亥丁

三品誠仁親王薨ス、公稱 補任天皇位ヲ皇孫和仁親王ニ讓ル、尊號ヲ奉リテ太上天皇ト曰フ、公稱 補任、御湯殿上 日誌、皇年代略記、在天正二十五年、自二千二百四十七年至二千二百七十一、年號ハ、天正ノ號ニ仍ルコト五年、第六年ニ改元ス文祿、四、慶長十六、

天皇紫宸殿ニ即位ス、時ニ年十六、公稱 補任、御湯殿上 日誌、豐後、

關白秀吉ヲ太政大臣ニ任ス、公稱 補任、豐後、

關白秀吉方廣寺ヲ東山ニ建ツ、太閤 記

二月

天正十六年 子戊

四月十四日

關白秀吉師ヲ發シテ、島津義久ヲ伐ツ、五月義久降リ西海平ク、豐後、國史實錄、太閤記、

車駕關白秀吉カ聚樂亭ニ幸ス、留ルコト五日、十八日還御ス、樂 行幸 記

此時秀吉京中地子銀五千五百三十餘兩ヲ御料ニ充テ、米地子八百石、内三百石ヲ院ノ御料、五百石ヲ六宮智仁親王、及ヒ關白ノ用ニ充テ、又高島郡八千石ヲ門跡公卿ノ用途ニ充ツ、事ハ第三編ニ詳ナリ、

黄金大小判ヲ造ル、舊章錄、寶貨 通用事考、

淀城ヲ築ク、泰平 年表

延曆寺ヲ造ル、皇代 紀事

是 歲

天正十七年 丑巳

三月

四月

天正十八年 寅庚

二月

三月

關白秀吉入朝シテ、北條氏直ヲ伐ンコトヲ請フ、御湯殿上 日誌、豐後、秀吉京師ヲ發ス、七月小田原城ヲ陷レ、北條氏ヲ亡ホシ、遂ニ

八月
十二月廿六日

白川ニ至リ、奥羽ヲ平定ス、

關白秀吉山科ノ田二百石ヲ奉リテ、供御ノ料ニ充ツ、御湯殿上日記

關白秀吉皇居ヲ造營シ成ル、車駕新造内裏ニ還御ス、御湯殿上日記

織田氏造營ヨリ未タ年所ヲ積マサレトモ、其完全ナラサル

ヲ以テ、更ニ造營セシナルヘシ、此時ノ地盤ハ、淺野長祚安政

御造營記ニ、南北百廿一間、東西百十五間トアリ、但大尺五寸間是大

ニ其地盤ヲ廣メシナルヘシ、此時ノ造營ハ、慶長十七年徳川

氏ノ改造ノ時之ヲ毀撤セリ、其紫宸殿ハ仁和寺、清涼殿ハ南

禪寺ニ賜ハリ、今ニ存セリ、

京都四面ニ土居ヲ築ク、室町殿日記、新草

此時京都荒廢、平安城ノ規模ハ、僅ニ殘餘ノ市街ヲ存スルノ

ミニテ、一望荒漠ノ墟タリ、秀吉前田立以ニ命シ、京都ヲ完聚

シ、更ニ諸大名ニ課シ、洛ノ四面ニ大堤ヲ築キ、以テ内外ヲ別

ツ、其周廻七里ニ過クト云フ、

豊臣秀次内大臣ト爲ル、秀吉關白ヲ罷ム、公卿補任

是 歲

天正十九年 卯辛
十二月四日

十二月廿八日

内大臣秀次關白ト爲ル、公卿補任、豊臣秀吉家譜

是 歲

文祿元年 辰壬

正月廿六日

天皇秀次カ聚樂第ニ幸ス、聚樂行幸記、梵舜日記

正月廿九日

秀次左大臣ト爲ル、公卿補任、續王代一覽

三月廿六日

秀吉路ヲ朝鮮ニ假リ、明國ヲ伐ントシ、遂ニ京師ヲ發シ、那古

十二月四日

那ニ赴ク、豊臣秀吉家譜、梵舜日記

十二月八日

山崎長橋ヲ造ル、惟高文集

文祿二年 巳癸

正月五日

改元、公卿補任

正親町上皇崩ス、皇胤紹運錄、時慶記

文祿三年 午甲

七月廿二日

東寺塔火アリ、分類年代記

文祿四年 未乙

七月八日

關白左大臣秀次罷ム、公卿補任

七月十五日

秀吉前關白秀次ヲ殺ス、公卿補任、豊臣秀吉家譜

是 歲

八月二日
八月廿五日
慶長元年丙申

秀次ノ諸子及妻妾三十八人ヲ三條河原ニ斬ル、御湯殿上日記、豐臣秀吉家譜、
秀吉奏シテ右大臣藤原晴季ヲ越後ニ貶謫ス、公卿補任

五月十一日
閏七月十二日

德川家康内大臣ト爲ル、公卿補任、孝亮記、
地大ニ震フ、畿内最モ甚シ、大佛殿、北野經堂、東寺金堂皆壞ル、伏見城類レ、死スル者二百餘人、孝亮記、堯舜日記、

九月 朔

明使伏見ニ至リ、成ヲ行フ、書詞不遜ナルヲ以テ、秀吉大ニ怒リ、使者ヲ逐ヒ、復征討ヲ議ス、豐臣秀吉家譜、

十一月十五日

秀吉耶蘇教徒二十四人ヲ捕ヘ、一條大路ニ徇ヘテ、之ヲ刑ス、孝亮記、

十一月廿七日

改元、堯舜日記

是 歲

始テ一分小判ヲ製シ、慶長金ト曰フ、舊軍錄、

慶長二年丁酉

二月

秀吉復タ兵ヲ朝鮮ニ發ス、豐臣實錄、

慶長三年戊戌

八月十八日

前關白太政大臣秀吉薨ス、時年六十三、東山阿彌陀峰ニ葬ル、豐臣臣、

八月廿二日
慶長四年己亥

秀吉家譜、
堯舜日記、
方廣寺成ル、堯舜日記

四月十七日

是 歲

詔シテ豐臣大明神ノ神號ヲ故關白秀吉ニ賜フ、御湯殿上日記、堯舜日記、
一分判ヲ頒造ス、舊軍錄、實貨通用事考、

慶長五年庚子

七月十七日

大阪將ニ事アラントス、人心騷擾ス、勅シテ權大納言藤原兼勝ヲ大阪ニ遣ハシ、權中納言秀頼ヲ訪ハシム、御湯殿上日記、

八月 朔

大阪ノ軍伏見城ヲ陷ル、孝亮記、堯舜日記、

九月十五日

德川家康石田三成等ト關原ニ戰ヒ、大ニ克テ三成等ヲ擒ス、慶長記、德川記、石田軍記、

十月 朔

德川家康石田三成、長曾我部盛親、僧惠瓊等ヲ京都ニ殺ス、

十二月廿一日

皇嫡子政仁ヲ立テ親王トス、御湯殿上日記、時慶記、孝亮記、
是ヨリ先キ、皇庶子良仁儲貳トナル、是ニ於テ家康ニ咨詢シテ、皇嫡子ヲ立テ儲貳トセラレシナリ、

慶長六年辛丑

八月

是歲

慶長七年寅壬

六月

是歲

慶長八年卯癸

二月十二日

二月廿二日

三月廿一日

慶長九年辰甲

九月

慶長十年巳乙

四月十三日

四月十六日

德川家康供御及ヒ諸司百官ノ采邑ヲ京師四邊ニ定メ、板倉勝重ヲ以テ所司代トナス、分類年代記、親王代一覽、大小判、一分銀、銀錠、碎銀ヲ更メ造ル、通用事考、舊章錄、

内大臣家康本多正純ヲ遣ハシ、東大寺ノ黄熟香ヲ截ラシム、親王代一覽、

德川家康二條城ヲ築ク、山城志、

德川家康右大臣ニ任シ、征夷大將軍トナル、時慶記、御殿上日記、

豐臣秀賴内大臣トナル、公卿補任、時慶記、

德川家康初メテ二條城ニ入ル、梵書日記、

幕府供御料壹萬石ヲ獻ス、舊章錄、

内大臣秀賴右大臣トナル、公卿補任、國史實錄、

家康征夷大將軍ヲ辭ス、秀忠内大臣征夷大將軍ニ任ス、公卿補任、梵書

七月廿三日

慶長十二年未丁

十二月廿二日

慶長十四年酉巳

八月

慶長十五年戌庚

九月

十月十四日

慶長十六年亥辛

三月廿七日

後水尾天皇

慶長十六年亥辛

三月廿八日

記日

左大臣藤原信尹ヲ以テ關白トス、公卿補任

幕府所司代板倉勝重ヲシテ更ニ宮殿ヲ修セシム、關白藤原昭實以下ノ諸第ヲ他ニ徙シ新上東門院第ヲ修造ス、孝亮記

伊勢兩宮ヲ修造ス、爾後廿一年ヲ以テ修造ノ限トシ、以テ永興トス、公卿補任、神皇正統記、

豐臣秀賴再ヒ方廣寺大佛殿ヲ造ル、烟草ヲ禁ス、孝亮記

天皇位ヲ政仁親王ニ讓ル、皇胤紹運、在位十八年、自二千二百七十二年、至二千二百八十九年、即位日、三年ハ慶長ノ號ヲ用テ、改元ニ、元和九、寬永六、

德川家康豐臣秀賴ヲ迎ヘ、二條城ニ相見ル、日本野史

四月十三日

後水尾天皇紫宸殿ニ即位ス、時ニ年十六、後陽成上皇政ヲ院中ニ

聽ク、公卿補任、兼
王代一覽、

五月

家康列侯ニ命シ皇居ヲ修メ、供御ノ田ヲ奉シ、又内庫亡失スル

所ノ祕籍寶器ヲ搜索シ之ヲ獻ス、國史
實錄

慶長十七年 子壬

六月

幕府令ヲ傳ヘ、公卿諸司ヲ誠シメ、文學ヲ勵勉セシメ、鷹ヲ飼フ

コトヲ禁ス、孝亮
記

慶長十八年 丑癸

正月

家康三十四侯及ヒ大坂ニ課シ、皇宮ヲ造營ス、是ニ至テ功ヲ竣

ム、御年譜、國
史實錄、

十二月十九日

天皇新造内裏ニ還御ス、孝亮
記

幕府豐臣氏造營ノ官殿ヲ毀テ、更ニ之ヲ造營ス、此ニ及ヒ落

成還御アリ、此時稍、地域ヲ弘メシ者ノ如クナレト、規模ハ土

御門内裏ノ製ニヨレリト云フ、是德川氏皇居造營ノ始メナ

リ、幕府令シテ役ヲ助ケシムルモノ三十七藩ナリ、

吉田了意加茂川ノ水ヲ引キ、船ヲ伏見ニ通ス之ヲ高瀬川ト稱

是 歲

慶長十九年 寅甲

七月廿九日

豐臣秀賴方廣寺盧舍那佛ヲ慶セントシ、預メ其儀ヲ設ク、德川

氏之ヲ停止ス、孝亮
記

十一月廿五日

家康秀忠大阪ヲ攻ム、之ヲ大阪冬陣ト云フ、御年
譜

和議成ル、御年譜、
孝亮記、

元和元年 卯乙

五月 八日

德川氏再ヒ大阪ヲ攻ム、此日大阪城陥リ、豐臣氏亡フ、大坂日記、
秀賴事記、

德川
記、

德川家康豐國社ヲ毀ツ、梵釋
日記

改元、孝亮
記

七月十三日

德川家康奏シテ元和令十七條ヲ定ム、又武家諸法度、寺社諸法

度ヲ定ム、孝亮記、大
政紀要、

七月廿八日

此ヨリ先キ、朝政衰ヘ、一切虛文トナレト、其名ハ未タ全ク滅

ヒス、此ニ及ヒ武家ヨリ法制ヲ立テ朝廷ヲ檢束ス、事ハ第三

編ニ詳ナリ、

ス、羅山
文集

元和二年 丙辰

三月廿一日

家康太政大臣ト爲ル、孝亮

元和三年 丁巳

四月十七日

太政大臣家康薨ス、公卿補任、德川 事ハ第三編ニ詳ナリ、

二月廿一日

八月廿六日

是 歲

東照大權現ノ號ヲ德川家康ノ祠ニ賜フ、職原鈔別
後陽成上皇崩、年四十七、皇胤紹運
幕府命ヲ下シ、京師ノ雜地稅ヲ蠲ク、孝亮記、

元和六年 庚申

六月十八日

將軍德川秀忠ノ女和子入内ス、之ヲ東福門院トス、大政

元和九年 癸亥

七月廿七日

將軍德川秀忠職ヲ辭ス、德川家光征夷大將軍ニ拜ス、公卿
幕府御料壹萬石ヲ増ス、之ヲ新御領ト稱ス、孝亮記、弘

寬永元年 甲子

閏八月十二日

改元、公卿
所司代板倉勝重卒ス、子重宗之ニ代ル、孝亮記、續

寬永三年 丙寅

四月廿五日

天皇中宮ト二條城ニ行幸ス、皇族妃嬪及ヒ公卿皆從フ、二條
行

九月 六日

天皇中宮ト二條城ニ行幸ス、皇族妃嬪及ヒ公卿皆從フ、二條
行

事ハ第三編ニ詳ナリ

寬永五年 戊辰

是 歲

幕府仙洞御所ヲ造營ス、多ク二條城宮殿ヲ移シテ之ヲ築ク、二
條

城

寬永六年 己巳

四月 七日

一品式部卿智仁親王薨ス、系圖記、

十月廿九日

皇女興子ヲ立テ内親王ト爲ス、皇胤紹運續

十一月八日

天皇遽ニ位ヲ皇女興子内親王ニ讓ル、皇胤紹運續

是ヲ明正天皇トス、事ハ第三編ニ詳ナリ、

明正天皇

在位十四年、自二千二百九十年至二千

寬永七年 庚午

九月十二日

天皇位ニ紫宸殿ニ即ク、時ニ年八歲、皇胤紹運續

寬永九年 壬申

正月廿四日

前征夷大將軍太政大臣源秀忠薨ス、孝亮記、寬
明日記、

寛永十一年 戊甲

七月

閏七月四日

將軍家光入朝ス、孝亮記家光上皇ノ宮ニ朝シ、御料七千石ヲ奉ル、孝亮記事ハ第三編ニ詳ナリ、

是歲

寛永十二年 亥乙

九月十六日

十二月七日

寛永十三年 子丙

六月

寛永十四年 丑丁

十月

寛永十五年 寅戊

此時市中ニ頒ツ所ノ銀五千貫ニシテ、市中ハ一千二百七十
九町、三万五千四百餘戸ナリト云フ、蓋シ所住町人ノミニシ
テ、其他官家侍社寺侍等ハ此外ナルヘシ、
幕府令ヲ下シ、浴中連費ノ地稅ヲ免ス、草翁

天皇上皇ノ仙院ニ觀ス、皇代紀事、公卿補任、

東寺塔火アリ、弘賢覺記、分類年代紀、

新錢ヲ鑄ル、之ヲ寛永通寶トス、舊草錢、實貨通用、

島原耶蘇ノ亂起ル、皇代紀事、耶蘇實記、實記、弘賢覺書、

二月

寛永十八年 巳辛

正月廿六日

三月廿三日

寛永十九年 午壬

六月十八日

寛永廿年 未癸

九月

十月三日

寛永二十年 未癸

十一月廿一日

正保元年 申甲

十二月十六日

正保三年 戌丙

四月

島原賊平ク、寛明日記、弘賢覺書、耶蘇實記、

皇宮ヲ修ス、公卿補任、皇代紀事、

天皇假宮ニ徙御ス、公卿補任、皇代紀事、

皇宮成ル、天皇新宮ニ還御ス、公卿補任、皇代紀事、一本皇胤紹運錄、

幕府新院ヲ中和門院宮跡ニ營ス、紀聞、

天皇位ヲ紹仁親王ニ讓ル、公卿補任、皇胤紹運錄、

後光明天皇 在位十一年、自二千三百四十年至二千三百四十四年、改元三、正保四、慶安四、永應三、

後光明天皇即位、時ニ年十一、公卿補任、皇代紀事、

改元 西章錄

幣ヲ東照宮ニ奉ス、以テ永式ト爲ス、皇代紀事、歌歌留、

十一月十八日

慶安元年子戊

祇園社火アリ、基長記、續、王代一覽、

二月十五日

慶安四年卯辛

改元公卿補任、皇代紀事、

四月二十日

五月六日

六月五日

承應元年壬辰

承應二年癸巳

六月廿三日

承應三年甲午

三月十二日

承應三年甲午

九月廿日

征夷大將軍左大臣源家光薨ス、公卿補任、槐記、

上皇落髮法號圓淨皇胤紹運續、近代帝系、

家綱内大臣ト爲リ、征夷大將軍ニ任ス、公卿補任

改元皇代紀事

皇居災ス、僅ニ文庫一字ヲ存スルノミ、天皇之ヲ法皇ノ櫻町宮ニ避ク、皇年代器記、一本皇胤紹運續、

此時足利氏兵亂ノ後、僅ニ存セシ古記多ク燒亡セリト云フ、

内裏ヲ經始ス、慶弘紀聞

天皇假殿ニ崩ス、壽二十二、嗣ナシ、群臣相議シ皇弟ヲ迎ヘテ踐

後西院天皇

降ス、皇年代器記、皇代紀事、近代帝系、事ハ第三編ニ詳ナリ、
在位八年、自二千三百十五年至二千三百廿二年、改元三、明曆三、萬治三、寛文二、

承應三年甲午

十一月十日

明曆元年乙未

四月十三日

是歲

明曆二年丙申

正月廿二日

万治元年戊戌

四月十三日

十二月晦

寛文元年辛丑

四月廿五日

正月十五日

皇居成ル、天皇花町殿ヨリ遷御ス、寛政皇居遺管記

改元皇代紀事

上皇初メテ修學院離宮ニ幸ス、寛元法皇宸記

天皇紫宸殿ニ即位ス、皇胤紹運續、近代帝系、

改元皇代紀事

皇大神宮火アリ、朝ヲ廢スルコト五日、弘賢覺書、分類年代記、萬天日錄、

改元皇代紀事

皇居災ス、天皇火ヲ白川宮ニ避ク、法皇ハ修學院離宮ニ避ク、公卿補任、弘賢覺書、萬天日錄、

寛文二年

寅壬

五月朔

此災、公卿ノ第邸百十九、佛寺十餘、民屋九百六十餘戸ヲ延焼セリ、

京師地大ニ震フ、月ヲ踰エテ止マス、殿屋民舎傾倒、死傷スル者多シ、五條橋壞ル、弘安、地震、記、

皇居ヲ經始ス、公卿補任、

皇居成ル、一本皇風、

寛文三年

卯癸

五月二日
十一月五日

正月廿六日

靈元天皇

在位廿四年、自二千三百廿三年至二千三百四十六年、即位ノ初メ寛文ノ號ニ仍ル十年、改元三、延寶八、天和三、貞享四、

寛文三年

卯癸

四月廿七日

天皇位ニ紫宸殿ニ即ク、時ニ年九歳、法皇政ヲ聽ク、皇胤紹運續、

寛文四年

辰甲

八月廿一日

是歲

幕府新院ヲ造營シ成ル、後西院上皇遷御ス、慶弘、
祇園町遊廓ヲ開クヲ許ス、京都府、古文書、

寛文七年

未丁

九月十八日

寛文九年

酉巳

正月廿日

延寶元年

丑癸

五月八日

盜御劍ヲ盜ム、所司代ナシテ賊ヲ捕ヘシム、賊誅ニ伏ス、公卿補任、
北野及四條ニ於テ貧民ニ賑給スルコト一百日、弘安、
内裡、法皇上皇新院、東福門院宮悉ク炎上ス、公卿補任、
天皇之ヲ上御靈社ニ避ケ、右大臣藤原基熙ノ第ニ遷御ス、此
災、民戸五千餘宇ヲ延焼ス、

九月廿一日

延寶二年

寅甲

四月十一日

延寶三年

卯乙

正月

是春

畿内大水、三條橋壞ル、分類年代記、一、

幕府大内及諸宮ヲ造營ス、諸大名ニ課シ役ヲ助ケシム、慶弘、

天下餓死スル者多シ、三月ヨリ五月ニ至ルマテ、飢民ヲ北野及

四條ニ賑恤ス、一本王、

法皇壽八十ヲ賀ス、皇代、

十一月十九日

皇宮成ル、一本皇胤 昭運錄

十一月廿五日

京師火アリ、延テ假宮ニ及フ、天皇火ヲト部兼連吉田第二避ク、
新宮災ヲ免ル、皇年代 畧記

十一月廿七日

天皇新宮ニ還御ス、公卿補任、 皇代紀事

延寶四年 丙辰

十二月廿六日

仙院女院火アリ、

延寶五年 丁巳

九月 廿日

仙院成ル、弘賢覺記、 萬天日錄

延寶六年 戊午

六月十五日

東福門院崩ス、舊章錄、萬 天日錄

延寶八年 庚申

五月 八日

征夷大將軍右大臣源家綱薨ス、公卿補任、續 王代一覽

八月十九日

後水尾法皇崩ス、年八十五、皇胤紹 運續錄 事ハ第三編ニ詳ナリ、

天和元年 辛酉

九月廿九日

改元 公卿 補任

天和三年 癸亥

二月 九日

朝仁親王ヲ立テ、皇太子ト爲ス、慶弘 紀聞

立太子ノ禮、南北合併ノ後、廢スル十三世、此ニ及テ之ヲ復興
アリシナリ、

貞享元年 甲子

二月 廿一日

改元 公卿 補任

三月 三日

詔シテ宣明曆ヲ更メ、大統曆ヲ行フ、公卿 補任

清和帝貞觀以降、宣明曆ヲ用フ、天和二年、日蝕大ニ差フ、是ニ
於テ新曆ヲ用フ、貞享曆是ナリ、

貞享二年 乙丑

二月 廿二日

新院崩ス、公卿補任、皇 胤紹運續錄

三月 七日

後西院天皇ヲ葬ル、近代 帝系

貞享四年 丁卯

三月 廿一日

天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、皇胤紹運續錄、 皇年代畧記

東山天皇

在位廿三年、自二千三百四十七年至二千三百六十九年、即位ノ初貞享ノ號ニ仍ル一年、改元ニ、元祿十六、寶永六、

貞享四年 丁卯

四月 廿八日

天皇位ニ紫宸殿ニ即ク、時ニ年十三、皇胤紹 運續錄

平安通志

卷之二十一

二十一

十一月十六日

大嘗會ヲ行フ、公卿補任、皇
是ヨリ先キ、大嘗會久シク廢ス、此ニ及ヒ幕府奏シテ之ヲ舉
ケシナリ、一覽 親王代

元祿元年 辰戌

九月 晦

元祿二年 巳巳

八月

元祿五年 申壬

九月廿六日

元祿六年 酉癸

四月 九日

元祿七年 戌甲

四月十八日

元祿九年 子丙

八條宮尙仁親王薨ス、年十九、慶弘
本院壽七十ヲ賀ス、

天皇上皇ニ觀ス、一本皇胤
紹運錄、

加茂祭ヲ復ス、公卿補任、皇胤
紹運錄、

廢絶殆ト三百餘年、是ニ於テ幕府奏シテ之ヲ舉行シ、永興ト
ス、

正月

十一月十日

十一月廿五日

元祿十四年 巳辛

八月

元祿十五年 午壬

六月 廿日

寶永元年 申甲

四月十三日

寶永二年 酉乙

二月十三日

寶永三年 戌丙

正月廿九日

寶永四年 亥丁

十月 朔

京都町奉行一員ヲ増ス、慶弘
本院崩ス、皇胤 紹運錄、

明正天皇ヲ泉涌寺ニ葬ル、

幕府六孫王廟ヲ改メ作ル、慶弘

洛中洪水、雷震九十八ヶ所、河水大ニ漲リ、人多ク死ス、海平

改元、皇代
紀事

幕府田一萬斛ヲ奉シテ、供御ノ料ニ充ツ、皇代 紀事、
舊章錄、

幕府上皇供御ノ田三千斛ヲ増ス、皇代 紀事、
七條鴨川西北廢田ヲ起
シ、市街ヲ開ク、之ヲ七條新地ト曰フ、

東宮新殿ヲ經營ス、盛賢
錄

十月 四日

後西院帝脱履ノ後御スル所ノ凝華洞殿趾ニ新ニ修營セシナリ、

十一月廿二日

東海道地大震フ、遠江海嘯、新井白須賀間、陸地海ニ没ス、人畜多ク死ス、親王代一覽、風也集、

寶永五年 子 戊

駿遠地大震フ、富士山火ヲ發シ、灰ヲ雨ラス、此時山頂別ニ一山ヲ成ス、之ヲ寶永山ト云フ、弘寶書、新草、親王代一覽、

三月 八日

大風、姊小路民家火アリ、延テ皇宮ニ及ヒ、仙院東宮皆燬ク、天皇火ヲ上加茂ニ避ケ、明日關白家熙第ニ遷御シ、假ニ皇居ト爲ス、上皇妙法院ニ避ケ、藤原兼香ノ第ニ徙御ス、慶弘紀聞

寶永六年 丑 巳

六月 三日

新院成ル、一本皇胤紹運錄、

十一月、上皇新院ニ徙御ス、

六月廿一日

天皇位ヲ皇太子ニ讓ル、公卿補任、近代帝系、

十二月十七日

天皇崩ス、泉涌寺ニ葬ル、皇胤紹運續、近代帝系、

寶永七年 寅 庚

七月

水戸宗堯禮儀類典ヲ上ル、泰平表在

中御門天皇

在位廿五年、自二千三百七十年至二千三百九十五年、改元三、寶永一、正徳五、享保二十、

寶永七年 寅 庚

十一月十一日

天皇位ニ紫宸殿ニ即ク、時ニ年十歳、皇胤紹運續、

正徳元年 卯 辛

四月十三日

改元、

正徳二年 辰 壬

十月

將軍徳川家宣薨ス、文昭院ト諡ス、子家繼嗣ク、

正徳三年 巳 癸

三月 十日

榎木町油小路火アリ、天皇之ヲト部兼敏吉田第ニ避ク、皇居仙院幸ニ免カル、公卿邸第十七、民屋千百戸焼失ス、慶弘紀聞

享保元年 申 丙

閏二月

將軍家繼薨ス、吉宗繼ク、

六月廿二日

改元、

享保三年 戌 戊

十一月

閑院宮ヲ建ツ、慶弘紀聞

是歲

享保四年 亥巳

十月

享保六年 丑辛

八月

九月廿七日

享保七年 寅壬

五月

享保十三年 申戊

六月十三日

享保十五年 戌庚

六月廿日

幕府復々山陵ヲ修理ス、大政紀要

水戸宗堯大日本史二百五十卷ヲ上ル、

幕府目安箱ヲ町奉行所ニ置ク、慶弘紀聞

法皇始メテ修學院離宮ニ幸ス、元慶御記、一本續王代一覽、

後屢行幸アリ、事ハ第一編ニアリ、

靈元法皇幕府ニ本朝世紀四十六冊ヲ賜フ、

將軍吉宗禮儀類典五百十五冊ヲ靈元法皇ニ獻ル、慶弘紀聞

禮儀類典ハ、水戸義公ノ編纂スル所、此ニ及ヒ幕府ヨリ之ヲ獻セシナリ、

東宮成ル、立太子ノ式ヲ行フ、

室町上立賣失火ス、公卿邸第及民屋三千七百九十戸延焼ス、西

享保十七年 子壬

八月六日

享保廿年 卯乙

三月廿一日

櫻町天皇

在位十一年、自二千三百九十六年至二千四百六年、改元三元文五、寬保三、延享三、

天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、皇胤紹運續錄、宗建記、交名記、

陣機三萬餘灰燼トナル、幕府米ヲ發シ之ヲ賑ハス、

靈元法皇崩ス、年七十九、慶弘紀聞

元文元年 辰丙

四月廿八日

元文二年 巳丁

四月十一日

元文五年 午戊

十一月十九日

天皇位ニ紫宸殿ニ即ク、時ニ年十六、皇胤紹運續錄、宗建記、三日抄、

改元、慶弘紀聞

中御門上皇崩ス、年三十七、公卿補任、宗建記、

大嘗會ヲ行フ、

大嘗會ハ東山帝中興アリシカ、中御門帝ハ行ハレヌ、此ニ至テ恒例トナレリ、

元文四年 未巳

十二月

元文五年 申庚

七月十六日

十一月廿四日

寬保元年 酉辛

二月廿七日

寬保二年 戌壬

六月廿九日

八月

十一月

延享元年 子甲

二月廿一日

十一月

寬永通寶鑄錢ヲ鑄ル、

京都大水、三條橋壞ル、

新嘗會ヲ行ヒ、明日豐明節會ヲ行フ、慶弘紀聞
新嘗祭廢スルコト、二百八十年、此ニ至リ再興ス、

改元、皇代紀事、
散狀留、

小除目叙位ヲ行フ、公卿補任、
散狀留、

是ヨリ先キ久ク廢ス此ニ至テ此ヲ學ク、

大雨連旬、三條橋壞ル、慶弘紀聞

南殿庭ニ橋ヲ裁ウ、弘賢覺書、追加風
也、慶弘紀聞、

改元、

幕府櫻町宮ヲ修ス、慶弘紀聞

是 歲

延享二年 丑乙

九月 朔

十月 七日

延享四年 卯丁

三月 十五日

五月 二日

桃園天皇

延享四年 卯丁

九月 廿一日

寬延元年 辰戊

七月 廿四日

寬延二年 巳巳

四月 廿三日

八月 廿六日

寶曆元年 未辛

幕府青木昆陽ニ命シ蘭書ヲ學ハシム、外交志稿

將軍德川吉宗職ヲ辭ス、

德川家重將軍職ヲ繼ク、慶弘紀聞

遐仁親王ヲ立テ皇太子ト爲ス、慶弘紀聞、
大政紀要、

天皇櫻町宮ニ遷御シ、位ヲ皇太子ニ禪ル、散狀留、皇胤紹運
續錄、近代帝系、

天皇位ニ紫宸殿ニ卽ク、時ニ年七歲、皇胤紹運續
錄、近代帝系、

改元、

櫻町上皇崩ス、年三十一、慶弘紀聞

風雨大雷、二條城天守雷震ノ爲メニ燒ク、卷平年表

十月廿八日
寶曆三年癸酉

改元慶弘紀聞

陰陽頭安倍泰邦測景推歩所ヲ梅小路第二立ツ風也集

是歲
寶曆四年甲戌

詔シテ曆法ヲ改メ、號ヲ寶曆曆ト賜ヒ、之ヲ頒行ス慶弘紀聞

十月十九日
寶曆八年庚寅

七月廿四日

權大納言藤原光胤等十五名ノ官職ヲ削ル、

光胤等德川氏ノ跋扈ヲ憤リ、王室ヲ復興シ、幕府ヲ討滅セン

コトヲ謀ルヲ以テナリ、之ヲ寶曆ノ變ト曰フ、事ハ第三編ニ在リ、

寶曆十一年辛巳

六月

將軍德川家重薨ス、惇信院ト諡ス、家治嗣ク慶弘紀聞

寶曆十二年壬午

七月廿二日

桃園天皇崩ス、年二十一皇胤紹運續錄、公卿補任、近代帝系、

皇子幼ナリ、皇姊智子内親王踐阼ス、

寶曆十三年癸未

後櫻町天皇

即位八年、自二千四百廿三年至二千四百三十七年、即位ノ初メ寶曆ノ號ニ仍ル一年、改元一、明和七、

寶曆十三年癸未

十一月廿七日

天皇位ニ紫宸殿ニ即ク、時ニ年廿四皇胤紹運續錄、公卿補任、

明和元年甲申

六月十九日

改元、

明和二年乙酉

四月

大雨鴨川溢ル、賀茂祭ヲ行フヲ得ス、明日浮橋ヲ設ケ、祭事ヲ行フ、

明和三年丙戌

三月

幕府六條坊門ヨリ六條ニ至ル土居ヲ毀ツ、是ヨリ先キ皇居ノ

東ヨリ六條坊門ノ間ヲ毀テ、此ニ及ヒ又其南ヲ毀ツ慶弘紀聞

大土居ハ、豊太閤ノ築ク所ナリ、人家増加ヲ以テ之ヲ毀テ、市

街ヲ廣メシナリ、

明和四年丁亥

八月廿一日

幕府藤井右門山縣大貳及ヒ其黨ヲ捕ヘ、謀叛ヲ以テ之ヲ論シ、

悉ク斬流ニ處ス大政紀要

是ヨリ先キ、竹内式部公卿ノ間ニ周旋シ、尊王ノ大義ヲ慨論シ、以テ幕府ヲ斥ケ、爲メニ幕吏ニ追逐セラル、大貳柳子新論ヲ著ハシ、暗ニ朝幕ノ名分ヲ論ス、右門擊劔ヲ善クシ、大貳ノ家ニ寓シテ、門弟數百人ヲ教ヘ、最モ大貳ノ説ヲ贊襄ス、事ハ第三編ニ詳ナリ、

明和五年 子戊

二月十九日

明和七年 寅庚

三月

十一月廿四日

桃園天皇ノ皇子英仁親王ヲ立テ皇太子トス、大政紀要

幕府櫻町宮ヲ修シ、諸侯ヲシテ役ヲ助ケシム、

天皇位ヲ皇太子ニ譲リ、櫻町宮ニ徙御ス、慶弘紀聞

平安通志卷之五十九

平安通志卷之六十

湯本文彦等編

第四編

長曆 自後桃園天皇至今上天皇

後桃園天皇 在位九年、自二千四百三十一年至二千四百三十九年、明和一、先帝ノ號ニ仍ル、改元一、安永八、

明和八年 卯辛

四月廿八日

天皇位ニ紫宸殿ニ卽ク、時二年十四、慶弘紀聞、近代帝系、

安永元年 辰壬

十二月十六日

改元 泰平年表

安永三年 午甲

十一月

幕府檢非違使服部某等ヲ流斬ス、寶曆ノ獄ヲ以テナリ、大政紀要

安永七年 戌戊

七月

京師大水、第牆ヲ壞シ、溝渠皆溢ル、慶弘紀聞

安永八年 亥巳

十一月九日

天皇崩ス、年二十二、皇胤紹運續、近代帝系、

嗣ナシ、關白尙實策ヲ定メ、閑院典仁親王ノ第五子兼仁ヲ迎

光格天皇

在位三十七年、自二千四百四十年、至二千四百七十六年、安永
一、先帝ノ號ニ仍ル、改元四、天明八、寛政十二、享和三、文化十三、

安永八年亥巳

十一月廿五日

天皇踐阼

安永九年子庚

十二月四日

天皇即位大政紀要

天明元年丑辛

三月

民ニ縦シテ即位式ノ裝飾ヲ觀セシム、

四月二日

改元

天明三年

是歲

大槻立澤蘭學梯階ヲ著ハス、洋學年表

天明四年辰甲

三月

幕府奏シテ穀千石ヲ閑院典仁親王ニ進ム、

天明六年午丙

九月

將軍徳川家治薨ス俊明院ト諡ス、家齊嗣ク、

十一月朔

日南至ス、詔シテ旬ノ節會ヲ修ム、中古以來此禮絶エ、此ニ及ヒ

天明七年未丁

六月

之ヲ再興ス

京畿飢ウ、衆民建禮門ニ詣リ、穀價低落ヲ祈ル、

天明八年申戊

正月晦

輦下火アリ、延テ皇宮ニ及フ、天皇火ヲ加茂ニ避ケ、聖護院ニ遷御シ、假居皇ト爲ス、

二月

此曉建仁寺園栗橋町失火、東南風烈ク、火京中ニ漲ル、皇居仙洞及ヒ二條城本丸ヲ延焼ス、此災ヤ東大和大路ヨリ西ハ千本ニ至リ、南七條ヨリ北立蕃町ニ至ル、皇居仙院、公卿邸第一百三十、武家邸第六十、大小寺院九百二十、人家十八万三千間、灰燼トナル、死者二千六百餘人、蓋シ應仁以來ノ大火ナリ、幕府使ヲ遣ハシ朝獻火災ヲ吊シ、又勘定奉行ヲシテ災地ヲ巡視シ、金數萬兩ヲ分テ公卿ヲ賑ハシ、米三千俵、銀六十貫ヲ市民ニ貸シ之ヲ救フ、

三月

幕府皇居ヲ造營ス、諸大名ニ課シ其役ヲ助ク、老中松平定信ヲシテ之ヲ董サシム、此役ヤ大ニ古制ニ徵シ舊儀ヲ考ヘ、大内裏

九月

寛政元年 西巳

皇居ノ制ニ倣ヒ、紫宸、清涼、校書、温明ノ諸殿、承明、日華、月華ノ諸門等ヲ造營シ、又南殿賢聖障子等皆古制ニ復ス、幕府五万石以上諸大名ヲシテ皇居築地ヲ造營セシム、

正月廿五日

改元

二月

幕府勘定奉行柳生久通ヲシテ皇居造營ノ工事ヲ監セシム、近畿諸藩ニ命シ工場ヲ護セシム、

三月

幕府京都市民ヲシテ宮地ヲ築カシム、

閏六月

太田資愛所司代ト爲ル、

八月

幕府儒臣柴野邦彦ニ命シ、南殿賢聖障子圖考ヲ作ラシム、此ニ至テ成ル、紀聞

此ヨリ先キ、南殿賢聖障子ノ畫古法ヲ失スル久シ、此ニ至リ

松平定信命シテ考證セシメシナリ、

皇居上皇宮及ヒ恭禮門院宮成ル、安政内裏造營誌

現今皇居ハ、北朝ノ初ヨリ此地ニ定マリ、幾回造營アリシモ、

其規制ハ大概土御門内裏土御門内裏ニ在リ、上ニ記セリ、ニ仍リシ者ニテ

十一月五日

十一月廿二日
十一月廿六日

寛政五年 癸丑

正月

古制ニ合セス、此ニ及ヒ大内裏皇居ノ制ニ基キ、紫宸、清涼、諸殿ヲ營シ、承明、日華、月華、立輝、朔平諸門ヲ建テ、南面ノ唐門ヲ廢シ、建禮門ヲ舊式ニ復ス、内朝ハ然ラサレト、外朝ハ大ニ其體制ヲ改メタリ、

天皇新宮ニ還御ス、慶弘紀聞、寛政造營誌

上皇青蓮院ヨリ櫻町宮ニ還御ス、

議奏前大納言藤原愛親、同藤原公明江戸ニ赴キ、太上天皇ノ號ヲ閑院典仁親王ニ上ルノ事ヲ辯ス、三月幕府二卿ヲ譴責シ京都ニ還ラシム、

幕府閑院典仁親王ニ廩米二千石ヲ進ム、慶弘紀聞

詔シテ舊曆ヲ停メ、新曆ヲ頒テ行フ、名ヲ寛政曆ト賜フ、公卿補任、狀狀留

寛政九年 己丁

十月十九日

享和元年 辛酉

二月五日

文化元年 甲子

改元

二月十一日 改元

文化二年 乙丑

三月十六日

藏人左少辨藤原建房ヲ叡山ニ遣ハシ、桓武天皇千年御忌ヲ修山、慶弘 紀聞

文化五年 戊辰

二月 八日

太政官印ヲ改鑄ス 公卿補任、散狀留

文化六年 己巳

三月廿四日

皇子惠仁親王ヲ立テ、皇太子ト爲ス、假ニ小御所ヲ以テ東宮ニ充ツ、

文化九年 壬申

六月 七日

詔シテ賀茂岩清水臨時祭ヲ行フ、臨時祭ノ禮廢スル數百年、此ニ及ヒ幕府詔ヲ奉シ、明年ヨリ之ヲ行フ、

文化十年 癸酉

閏十一月三日

後櫻町上皇崩ス、年七十四、慶弘 紀聞

文化十四年 丁丑

三月廿二日

仁孝天皇

天皇位ヲ皇太子ニ禪リ、櫻町宮ニ遷御ス、公卿補任、散狀留、莖統記

文化十四年 丁丑

九月廿一日

天皇即位ノ式ヲ行フ、準三宮藤原政暉ノ女從三位繁子ヲ女御トス、

文政元年 戊寅

四月廿二日

改元 大嘗會ヲ行フ、慶弘 紀聞

文政五年 壬午

十一月廿一日

幕府奏シテ修學院離宮ヲ修メ、上皇ノ遊幸ヲ請フ、大政 要紀

文政七年 甲申

九月廿一日

上皇始テ修學院離宮ニ幸シ紅葉ヲ賞シ、侍臣ニ命シテ詩歌ヲ詠セシメ、雅樂ヲ奏ス、此後一歳二回行幸スルコト、ナレリ、修學院行幸、靈元法皇崩後久シク絶エ、此ニ及ヒ行幸アリ、將軍之ヲ聞キテ、畫工ニ命シ鹵簿ヲ寫シ之ヲ觀ルト云フ、後銀百貫ヲ納レ、行幸歳費ニ充ツ、

文政九年 丙戌

是歲

天保元年 庚寅

十二月十一日

天保二年 辛卯

三月

六月十四日

天保三年 壬辰

正月

十月

是歲

天保五年 甲午

十二月

天保六年 乙未

青地宗林氣海觀瀾ヲ著ス、理學此ニ始ル、日本教
育史

改元

幕府大ニ安治川口ヲ浚ヘ、一阜ヲ爲ス天保山ト號ツク、
皇子統仁生ル、瀨宮ト號ス、

伊能忠敬全國海岸ヲ實測シ、日本全圖ヲ作ル、

上皇密ニ山科勸修寺ニ幸シ、琉球貢使ノ江戸ニ赴クヲ觀ル、弘慶
紀

水戸侯齊昭畝傍山陵修造ノ事ヲ幕府ニ建議ス、景山公
建策

朝鮮大ニ飢ウ、且ツ京城火ス、幕府金壹萬兩ヲ宗氏ニ貸シ之
ヲ賑ハス、

六月廿一日

天保七年 丙申

四月七日

九月

九月 朔

十月

天保八年 丁酉

二月

天保九年 戊戌

十月

天保十年 己亥

十二月

是歲

天保十一年 庚子

皇子統仁ヲ以テ儲君トシ、九月十八日親王ト爲ス、

上皇修學院離宮ニ幸ス、

凶荒京都飢ウ、幕府町毎ニ米貳斗五升ヲ賑ハス、

將軍家齊老シ、世子家慶立ツ、大將軍ニ任ス、時ニ年四十五、
幕府再ヒ京都ノ飢ヲ賑ハス、

大鹽平八郎亂ヲ大坂ニ爲ス、討シテ之ヲ平ク、市街一万八千
餘戸ヲ燒ク、

蘭人長崎ニ來リ我漂民ヲ護送ス、

幕府渡邊華山、高野長英等ヲ罪ニ處ス

上皇勅シテ修學院離宮ノ止止齋ヲ仙洞ニ移ス、慶弘
紀聞

宇田川榕庵舍密開宗ヲ著ハス、化學此ニ始マル、日本
教
育史

三月十四日
十一月

天保十二年 丑辛

閏正月廿七日

是月

天保十三年 寅壬

九月

十二月

弘化元年 辰甲

十二月二日

高島秋帆洋式砲術ヲ行ハシ幕府ニ建議ス陸軍歴史
統仁親王ヲ立テ、皇太子トシ、小御所ヲ修メ假東宮トス、
上皇仙洞ニ崩ス、年七十、
水戸侯齊昭諡號復古ノ議ヲ上ル景山公廟號

左近衛大將藤原輔熙等ヲ上皇ノ陵ニ遣シ、諡ヲ上リ光格天皇ト曰フ、

前大將軍家齊薨ス、年六十九、文恭院ト諡ス慶弘紀聞
水野忠邦關老ト爲リ、大ニ幕政ヲ改革ス、

幕府令シテ海防ヲ嚴ニス、

幕府旨ヲ奉シ學館ヲ建春門前ニ興ス、名ヲ學習院ト賜フ、藤原貞善、藤原聰長ヲ以テ頭トシ、公卿ニ命シ就テ學習セシム慶弘紀聞、徳川禁令考

改元慶弘紀聞

弘化三年 午丙

正月廿六日

二月十三日

孝明天皇

弘化三年 午丙

閏五月廿八日

七月七日

九月

弘化四年 未丁

九月廿三日

嘉永元年 申戊

二月廿八日

十二月十六日

十二月廿一日

嘉永二年 酉巳

八月二十日

天皇崩ス、年四十七、仁孝ト諡ス明治前記
皇太子統仁親王踐阼ス大政紀要、明治前記
在位廿一年、自二千五百七年至二千五百廿七年、弘化一年ハ先帝ノ年號ニ仍ル、改元六、嘉永六、安政六、萬延一、文久三、元治一、慶應三、

學習院成ル

京都大水、三條橋、五條橋壞ル、

幕府皇宮ヲ修ス、

天皇即位ス、

改元

藤原夙子ヲ立テ女御ト爲ス、

大嘗會ヲ行フ

天皇釋奠ヲ小御所ニ行フ

十二月

嘉永三年 戊戌

西洋種痘術ヲ傳フ、

二月 四日

嘉永四年 亥辛

釋奠ヲ學習院ニ行フ、

三月 十五日

嘉永五年 子壬

和氣清麻呂ニ正一位ヲ追贈シ、護王社ノ號ヲ賜フ、明治前記

七月

九月 廿二日

嘉永六年 丑癸

洪水、三條、五條橋壞ル、八月又洪水、舟橋ヲ以テ往來ヲ通ス、
皇子降誕、祐宮ト號ス、今日抄

四月 六月

幕府水戸老侯齊昭ヲ隱居セシメ、藤田彪以下ヲ禁錮ス、
北亞米加合衆國水師提督彼理、軍艦ヲ將テ浦賀來リ、國書ヲ
奉シ交通貿易ヲ求ム、大政紀要、明治前記、

七月

七月 十七日

阿部正弘將軍ノ旨ヲ受ケ、水戸侯齊昭ヲ起シ幕議ニ參セシ
ム、明治前記
將軍家慶薨ス、諡シテ慎徳院ト曰フ、家定繼ク、
露西亞國水師提督軍艦ヲ率井テ長崎ニ入り、國書ヲ奉シ交

是 歲

安政元年 寅甲

正月 十四日

三月

四月 六日

通五市ヲ求ム、大政紀要、明治前記、
大ニ海防ヲ嚴ニシ、兵船軍器ヲ備フ、大政紀要
彼理重テ浦賀ニ來ル、大政紀要、明治前記、
米國ト條約ヲ訂結ス、
皇宮、仙院火ス、天皇下鴨ニ避ケ聖護院ニ徙御ス、
此日午下仙洞ヨリ出火、皇居其他百九十四町、六千九百九十
三戸ヲ燒ク、

七月 九日

十一月 十八日

十一月 廿七日

安政二年 卯乙

二月

十一月 廿一日

幕府軍制ヲ改メ、日本國旗ヲ日章ト定ム、
小濱郡山、膳所、淀、篠山、高槻諸藩ニ命シ、京都ヲ守衛セシム、
改元、
皇居造營ヲ創ム、九月ニ至テ成ル、
車駕新宮ニ還御ス
此ヨリ先キ聖護院ヨリ桂宮ニ遷御シ、此ニ及ヒ儀仗ヲ備ヘ
新宮ニ還御アリ、民ニ縱觀ヲ許ス、此時町奉行淺野長祚其事

安政三年 丙辰

正月

安政四年 丁巳

十二月八日

ヲ監シ、安政内裏造營記ヲ編纂セリ、是レ現在ノ皇居ナリ、
幕府魯英佛ト假條約ヲ結締ス、
幕府林大學頭、津田半三郎ヲ上京セシメ、外交事狀ヲ陳奏ス、朝廷斥ケテ聽カス、

安政五年 戊午

正月廿二日

幕府堀田正睦ヲ上京セシメ、外交事狀ヲ奏ス、公卿多ク攘夷論ヲ主張シ、兵庫開港ヲ許サス、

三月廿二日

幕府ニ勅答シテ三家以下諸大名衆議ヲ盡シ上奏セシム、

四月廿三日

幕府井伊直弼ヲ以テ大老職トナス、

六月廿一日

高松、松江、桑名三侯ヲシテ京師ヲ守ラシム、明治前記

六月廿四日

水戸、尾張、越前、三侯登營シテ、假條約ノ不可ヲ論シ、併セテ繼嗣ノ事ニ及フ、大老直弼斥ケテ容レズ、

七月五日

幕府水戸老侯齊昭ヲ幽閉シ、尾張侯慶勝、越前侯慶永ニ隱居謹慎ヲ命ス、明治前記

七月四日

將軍家定薨ス、家茂繼ク、

將軍薨去ハ三家罪責ノ前日ニ在レト、大老祕シテ發セス、八月ニ及テ發表ス、

八月八日

内勅ヲ水戸老侯齊昭ニ下ス、太政紀要、明治前記

朝議幕府ノ非政ヲ憂ヒ、齊昭ニ命シ諸藩ヲ率井將軍ヲ助ケ外侮ヲ禦カシメントスルニ在リ、

是月

佛艦三艘品川ニ入り國書ヲ奉シ、交通貿易ヲ求ム、之ヲ許ス、

是秋

虎列刺病大ニ流行シ、死スルモノ數万人、明治前記

九月

間部銚勝上京シ、内勅關係ノ者ヲ捕ヘ江戸ニ押送ス、太政紀要、明治前記

十月廿五日

幕府外國奉行五員ヲ置ク、

安政六年 己未

二月十八日

青蓮院宮ニ謹慎ヲ命ス、

三月十一日

鷹司父子、近衛、三條ノ四公、水戸内勅ニ關セシテ以テ落飾退隱ヲ乞フ、

幕府橫濱ハ開港場タルヲ以テ、商戸ヲ移シ大ニ市街ヲ經營

五月廿八日
八月

ス。米露英佛蘭五國ニ長崎箱館横濱ニ於テ自由貿易ヲ許ス、幕府水戸老侯齊昭ヲ永蟄居トシ、一橋侯慶喜ニ隱居謹慎ヲ命シ、其他死罪流竄禁錮ニ處スルモノ多シ、之ヲ戊午ノ大獄ト云フ、

八月

幕府朝廷ニ金五千兩、攝家其他二万兩、九條關白ニ家祿千石ヲ加フ、明治前記

萬延元年 庚申

三月三日

水戸薩摩脱藩士十七人、大老井伊直弼ヲ櫻田門外ニ斬ル、大政前記

三月十八日

改元

高松、松江、彦根、郡山、桑名五藩ニ命シテ京師ヲ警衛セシム、淀、高槻、膳所、篠山、四藩ニ命シテ四方要口ヲ守ラシム、

六月

九月

十一月

祐宮ヲ儲君ト爲ス、
學國ト和親ヲ締結ス、
水戸藩士民兵ヲ起ス、常野亂ル、

是歲

文久元年 辛酉

二月十九日

改元 明治前記

九月二十日

皇妹和宮、將軍家茂ニ降嫁シ京師ヲ發ス、

文久二年 壬戌

正月

浮浪ノ士、關老安藤信正ヲ坂下門外ニ傷ク、大政前記

三月

近衛鷹司二公ノ謹慎ヲ釋ス、

四月

獅々王院宮ノ永蟄居ヲ釋ス、

五月十一日

大原重徳ヲシテ、朝命ヲ幕府ニ下サシム、明治前記

五月

幕府尾張、水戸、越前、土佐、宇和島諸侯ノ罪ヲ赦シ、關老安藤氏ヲ免ス、

六月廿三日

九條尙忠ノ關白ヲ免シ、近衛忠熙ヲ以テ之ニ代フ、明治前記

是月

幕府内田垣二郎、榎本釜次郎ヲ和蘭ニ差ハシ、軍艦製造ヲ督シ海軍ノ事ヲ傳習セシム、

七月一日

幕府勅令遵奉ノ請書ヲ上ル、大政前記

七月六日

一橋慶喜ヲ將軍輔佐トス、明治前記

七月九日

越前老侯春岳ヲ政事總裁職トス、大政前記

八月廿一日

閏八月朔

閏八月五日

閏八月十四日

閏八月十四日

十月三日

十月

十二月五日

十一月廿日

十一月

島津久光ノ從士、英人ヲ生麥村ニ斬ル、

幕府會津侯松平容保ヲ京師守護職トス、

故水戸老侯齊昭ニ從二位大納言ヲ贈ル、

幕府戸田和三郎ヲ以テ山陵奉行トス、

幕府諸藩ノ參覲ヲ三年一度滞在百日トシ、其家眷ヲ封地ニ移スヲ許ス、明治前記

三條姉小路兩卿、勅旨ヲ奉シテ東下ス、大政紀要、明治前記

勅旨ハ攘夷期限ヲ定ムルト、親兵ヲ置クノ二件ナリ、

正親町三條、中山、大原諸氏時事ヲ建議ス、之ヲ斥ケ大原氏ヲ幽閉ス、

將軍二勅使ヲ延見シ、勅旨ヲ奉ス、

幕府井伊、内藤、間部、酒井、堀田、久世、安藤、松平、脇坂、水野、諸氏ヲ譴責シ、或ハ其領地ヲ削ル、

故島津侯齊彬ニ從三位中納言ヲ贈ル、

品川御殿山英館火アリ、或ハ云フ脱藩ノ諸士之ヲ燒クト、明治前記

十二月

文久三年 亥癸

正月

二月十九日

二月

三月五日

三月十一日

三月

三月十九日

朝廷參政寄人ヲ置キ國事掛ト號シ、三條實美專ラ其事ヲ督ス、是レ建武中興ノ時ヨリ、五百年ヲ經テ國政管掌ノ官ヲ再興アリシナリ、

青蓮院宮復飾、中川宮ト號ス、先朝紀要

一橋慶喜、松平慶永、將軍ニ先テ入京ス、大政紀要

近衛忠熙ノ關白ヲ免シ、鷹司輔熙ヲ以テ之ニ代フ、大政紀要、明治前記

英國公使生麥償金ノ事ヲ論シ、軍艦ヲ以テ幕府ニ逼ル、江戸

戒嚴、明治前記

將軍家茂上洛參内ス、大政紀要、明治前記

車駕賀茂神社ニ行幸ス、將軍百官諸侯ヲ率井テ供奉ス、

寬永二條行幸ノ後、二百三十餘年ヲ經テ此行幸ノ儀アリ、

將軍上洛、京都町人ニ銀五千貫目ヲ頒與ス、

十萬石以上諸藩ヲシテ親兵ヲ貢セシメ、三條實美ニ命シ之ヲ督セシム、

建武中興ノ後此ニ及ヒ五百十餘年ヲ經テ、朝廷再ヒ親兵ヲ

四月十一日

車駕石清水神宮ニ行幸ス、

五月九日

閣老小笠原長行、英國公使ニ生麥償金卅五萬兩ヲ交附ス、延議之ヲ非トシ罪ニ處ス、明治前記

五月十日

長州下關ニ於テ、外國船ヲ砲撃ス、大政紀要

六月九日

將軍家茂遽ニ海路江戸ニ歸ル、

七月

英國軍艦鹿兒島ニ至リ、生麥償金ヲ求ム、薩人迎戰之ヲ走ラス、大政紀要

八月

幕府供御料十五萬俵ヲ上ル、先朝紀要

八月十八日

勅シテ大和行幸ヲ止メ、長兵ノ宿衛ヲ免ス、三條實美等七人長州ニ走ル、勅シテ其官爵ヲ褫フ、大政紀要、明治前記

八月十七日

松本奎堂、藤本鐵石等中山侍從ヲ奉シテ兵ヲ大和ニ擧ク、幕府諸藩ニ命シテ之ヲ伐ツ、侍從敗レテ長州ニ走リ、松本藤本等死ス、

十月

平野二郎、澤宣嘉ヲ奉シ兵ヲ生野ニ擧ク、幕府伐テ之ヲ平ク、大政紀要

十二月廿三日

鷹司輔瀨關白ヲ辭ス、右大臣二條齊敬之ニ代ル、大政紀要、明治前記

十二月

瑞士國ト條約ヲ訂結ス、明治前記

元治元年甲子

正月廿一日

將軍三十八諸侯ヲ從ヘ入朝ス、大政紀要、明治前記

二月十五日

會津侯容保ヲ軍事總裁ニ、越前老侯春岳ヲ京都守護職トス、

二月二十日

改元

二月廿五日

一橋慶喜ヲ禁裏御守衛總督攝海防禦指揮トス、

四月七日

越前老侯春岳、京都守護職ヲ罷ム、會津侯容保之ニ代ル、

四月十一日

桑名侯松平定敬、京都所司代ト爲ル、明治前記

四月廿日

列藩ノ建議ニヨリ、政事一切幕府ニ委任スルノ勅アリ、幕府奏シテ釐革スル所多シ、大政紀要、明治前記

五月二日

將軍江戸ニ還ル、明治前記

五月晦

武田耕雲齋等兵ヲ擧テ筑波山ニ據ル、明治前記

七月十一日

水戸内勅奉還ノ事ヨリ激セシモノナリ、

七月十九日

脫藩士等佐久間象山ヲ木屋町ニ殺ス、明治前記
長藩ノ兵闕ヲ犯ス、幕府薩會ノ兵防戰之ヲ敗ル、兵燹三日、京師大

八月

八月八日

半焦土トナル、大政紀要、明治前記、
英米佛蘭四國ノ兵、軍艦ヲ率テ長州ニ逼ル、應戰連日、遂ニ和ヲ講ス、明治前記、

十一月

幕府征長ノ師ヲ發ス、德川慶勝ヲ以テ大將ト爲シ、二十三藩ニ命シテ進討セシム、
長藩三宰ヲ誅シ、首ヲ送テ罪ヲ軍門ニ講ス、將軍家茂奏シテ征長ノ師ヲ班ヘス、大政紀要

慶應元年 乙丑

正月

正月十四日

二月四日

四月七日

五月十六日

九月

十月

長州高杉晋作奇兵隊ヲ募リ藩論ヲ一定ス、
長州ニ在ル三條以下五卿ヲ筑前ニ移ス、
武田耕雲齋ノ黨ヲ敦賀ニ斬ル、
改元
幕府重テ征長ノ師ヲ部署シ、將軍進發ス、
横濱在留各國公使、兵庫開港ノ事ヲ幕府ニ逼ル、
將軍辭表ヲ呈シ、軍職ヲ一橋慶喜ニ命セラレンコトヲ請ヒ、併セテ兵庫開港ノ勅許ヲ乞フ、允サレヌ、

慶應二年 丙寅

六月

八月二十日

八月廿五日

十二月五日

十二月廿五日

今上天皇

慶應三年 丁卯

正月九日

正月廿七日

五月廿四日

九月四日

九月六日

十月十四日

十月十四日

白耳義國ト條約ヲ訂結ス、
將軍家茂大阪ニ薨ス、奏シテ一橋慶喜ヲ繼嗣トス、
勅シテ將軍ノ薨ヲ以テ征長ノ兵ヲ解カシム、
此時幕府ノ軍常ニ利アラヌ、諸藩傍觀大勢已ニ去リ、慶喜德川家ヲ繼クト雖トモ未タ軍職ニ任セス、
德川慶喜大將軍ニ任ス、
天皇痘ヲ患ヒ崩ス、年三十六、

天皇踐阼、二條齊敬攝政、
孝明天皇ヲ泉山後月輪山陵ニ葬ル、
兵庫開港ヲ許ス、
丁抹國ト條約ヲ訂結ス、
意多利亞國ト條約ヲ訂結ス、明治前記
將軍德川慶喜大政返上ヲ請フ、

十月十五日
十月廿九日
十一月三日
十二月十日

勅シテ將軍慶喜ノ大政返上ヲ允シ、後命ヲ待タシム、明治前記
宣命使ヲ遣ハシ大政復古ノ事ヲ月輪山陵告ク、
國事掛近衛忠房等太政官再興ノ議ヲ上ル、

勅シテ攝政、關白、征夷大將軍議奏、傳奏、守護職、所司代、等ノ職事ヲ廢シ、更ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置テ、以テ大政ヲ行ハシム、明治前記

十二月十日

十二月十二日

十二月廿二日

大政復古ノ事ヲ公卿ニ告ク、
德川慶喜二條城ヲ去テ大阪ニ赴ク、
勅シテ萬機ヲ親裁シ、博ク公議ヲ採ルコトヲ布告ス、明治史要

大政不振、朝廷式微ヨリ殆ント七八百歳、此ニ至リ朝綱一振、
大政復古、天下再ヒ天日ノ光輝ヲ仰クコトヲ得タリ、

天皇建春門ニ御シ、薩長土肥四藩ノ練兵ヲ觀ル、明治史要

十二月廿七日

明治元年戊辰

正月 朔

正月 三日

四方拜節會、百官朝賀ス、明治史要、太政官日誌

幕府ノ軍京師ヲ犯ス、官軍之ヲ伏見鳥羽ニ破ル、詔シテ嘉彰親王ヲ征討大將軍トナシ、錦旗節刀ヲ賜ヒ之ヲ討ツ、連日交戦皆

正月 六日

正月 七日

正月 九日

勝ッ
公卿ノ涅齒點眉ハ、必シモ循守セサラシム、
征討大將軍淀城ニ入ル、德川慶喜海路東走ス、
詔シテ德川慶喜ヲ討ス、
三條實美岩倉具視ヲ副總裁トス、
大坂城火ス、

正月 十日

正月 十五日

詔シテ德川慶喜以下ノ官位ヲ褫フ、此日大將軍大坂城ニ入ル、
天皇元服ヲ加フ、
東久世通禧ニ勅シ外國公使ト兵庫ニ會シ、大政復古ノ事ヲ告ケシム、

職制ヲ更メ神祇、内國、外國、海軍、陸軍、會計、刑法、制度八局ヲ置ク、
親王ヲ三公ノ上ニ班ス、
鎮臺ヲ大坂ト兵庫ニ置ク、

正月 十七日

正月 十八日

正月 廿二日

紙幣發行ノ議ヲ決シ、三岡公正ニ其事ヲ掌ラシム、

正月 廿三日

正月 廿七日

二條城ヲ以テ太政官代ト爲ス、
大將軍凱旋、錦旗節刀ヲ上ル、

二月三日

天皇太政官代ニ幸シ、親征ノ詔ヲ頒ツ、
三職七料ヲ改メ、總裁局及ヒ神祇、内國、外國、軍防、會計、刑法、制度
ノ七局トス、

二月九日

總裁熾仁親王ヲ征東大總督ニ、議定嘉彰親王ヲ海軍總督ニ任
ス、

二月十日

貢士ノ制ヲ定ム、

二月十九日

京都裁判所ヲ置キ、參事萬里小路博房ヲ總督トナス、

二月廿三日

土佐藩士佛人ヲ殺セシ者二十人ヲ堺浦ニ梟セシム、

二月廿八日

天皇諸侯ヲ便殿ニ召シ、親諭シ同心協力國事ニ盡サシム、

二月晦

英佛蘭三國公使參朝セントス、三枝翁之ヲ途ニ要撃ス、英國公
使朝スルコトヲ果サス、

三月三日

英國公使パークス參朝ス、

三月九日

天皇太政官代ニ幸シ、蝦夷地開拓ノ事ヲ諮詢ス、

三月十四日

天皇南殿ニ御シ、公卿諸侯ヲ率ヒテ、天神地祇ヲ祭り、五事ヲ誓
約ス、

三月十八日

准后藤原氏ヲ尊テ皇太后ト爲シ、大宮ト稱ス、

三月廿一日

車駕親征、此日京都ヲ發シ、二十三日大坂ニ次ス、

四月四日

官軍江戸城ヲ收ム、

四月五日

太政官日誌ヲ刊行ス、

閏四月六日

豐國社ノ祀典ヲ復シ、更ニ其社ヲ營セシム、

閏四月八日

車駕大坂ヨリ至ル、徳川慶喜降ルヲ以テナリ、

閏四月廿一日

將ニ太政官ヲ二條城中ニ營セントスルヲ以テ、官代ヲ禁中ニ
移シ、更ニ太政官官制ヲ改ム、

閏四月廿四日

京都裁判所ヲ改メ、府ト爲シ、長谷信篤ヲ知事ニ任ス、

五月十日

癸丑巳來死事者ヲ東山ニ祭ル、

六月五日

鎮臺ヲ江戸ニ置ク、大總督府ニ管ス、

七月十七日

江戸ヲ以テ東京トス、

八月九日

車駕賀茂社ニ幸ス、

八月十七日

大學寮代ヲ梶井宮ノ邸ニ置ク、

八月廿六日

天皇聖誕日ヲ以テ天長節ト定ム、

按ニ聖誕日ヲ祝日トシ、天長節ト稱スルハ、光仁天皇ノ時ニ
始レリ、今此制ニ復セシナリ、

八月廿七日

天皇紫宸殿ニ即位ス、

九月八日

明治ト改元シ、一世一元ト定メ、大赦ヲ行フ、

九月十五日

仙臺降ル、

九月十六日

皇學校ヲ九條道孝ノ邸ニ、漢學校ヲ梶井宮ノ邸ニ設ク、

九月二十日

車駕東京ニ幸ス、

九月廿二日

會津降ル、

十月十三日

車駕東京ニ至ル、江戸城ヲ改テ皇居トシ、東京城ト稱ス、

十月廿九日

舊幕府刑法ヲ改メ假リニ死流徒笞四刑ヲ定ム、

十二月二日

東征大總督熾仁親王錦旗節刀ヲ上ル、

十二月八日

使ヲ遣シ東北平定ヲ太神宮ニ告ク、

十二月廿二日

車駕東京ヨリ至ル、

十二月廿八日

女御藤原氏ヲ立テ皇后トス、

明治二年 己巳

正月五日

賊參與横井時存ヲ殺ス、

正月廿四日

薩長土肥四藩版籍返上ヲ請フ、

二月廿四日

太政官ヲ東京ニ移シ、留守官ヲ京都ニ置キ、議定鷹司輔照ヲ留

守トス、

三月七日

車駕東京ニ行幸ス、

五月十八日

五稜廓降り、函館平定ス、

六月二日

大ニ戊辰ノ戦功ヲ賞ス、

六月十七日

勅シテ諸藩ノ版籍返上ヲ許シ、藩主ヲ以テ知藩事ニ任ス、

九月二日

京都皇漢兩學校ヲ廢ス、將ニ大學校ヲ設立セントスルヲ以テ

ナリ、

九月

刑部省ノ京都留守ヲ廢シ、彈正臺留守ヲ置キ、京都府ト協力非

違ヲ彈セシム、

九月

京都辨官傳達所ヲ留守官傳達所ト改稱ス、

十月四日

皇后東京ニ行啓シ、是日京都ヲ發ス、

明治三年 午庚

正月廿四日

留守官ヲ京都府ニ合併ス、

四月廿四日

府藩縣ニ令シテ普ク種痘ヲ行ハシム、

是月

留守官ヲ京都府ニ合併スルヲ罷メ、禁内ニ還移ス、

七月廿五日

京都府學校ヲ設ク、

閏十月廿日
十二月

明治四年 辛未

三月十三日
四月廿三日
六月廿六日
七月三日
七月十四日
七月十八日
十月十日
十一月十七日
十二月十八日
十二月廿二日

工部省ヲ置ク、
親王二世以下賜姓ノ制ヲ立ツ、
京都府ニ山城全國及丹波國三郡ヲ統轄セシム、

二條城ヲ京都府ニ管セシム、
鎮臺ヲ東山西海二道ニ置ク、
京都府廳ヲ二條城ニ轉移ス、
郵便ヲ東京横濱間ニ設ク、
詔シテ列藩ヲ廢シ悉ク縣トナス、
大學ヲ廢シ文部省ヲ置ク、
本願寺ニ博覽會ヲ開ク、
東京宮城ニ於テ大嘗會ヲ行フ、
華士族ノ農工商ヲ營ムヲ許ス、
大ニ府縣ヲ改置シ、更ニ京都府ヲ置キ長谷信篤ヲ以テ知事ニ任ス、此時全國ヲ分テ、三府七十二縣トナシ、郡縣ノ制大ニ定マ
ル、

明治五年 壬申

正月 二日
正月 三日
二月 廿八日
三月 十日
三月 廿二日
五月 廿三日
五月 晦
六月 朔
六月 二日
六月 三日
六月 四日
七月 朔
八月 十五日

各國公使參朝、新正ヲ賀ス、是ヲ外國公使朝賀ノ始トス、
始メテ元始祭ヲ行フ、
兵部省ヲ廢シ、陸軍海軍二省ヲ置ク、
知恩院建仁寺本願寺ニ博覽會ヲ開ク、
皇太后東京ニ行啓シ、是日京都ヲ發ス、
車駕東京ヲ發シ、中國九州ニ巡幸ス、
車駕京都ニ行幸ス、
桂宮ニ臨幸ス、
車駕泉山ニ幸シ、後月輪山陵ヲ拜ス、
此日輦路建仁寺知恩院ノ兩博覽會場ニ臨幸ス、
車駕京都府廳ニ臨幸シ、府政ヲ親聽ス、
此日吏員ニ酒饌ヲ賜ハリ、輦路中學校女紅場ニ歷幸ス、
車駕京都ヲ發ス、
全國ニ郵便ヲ開ク、
始メテ國立銀行ヲ設立ス、

十月 七日
十一月十五日
十二月 一日
十二月三日

明治六年 癸酉

一月 四日
一月 九日
二月十五日
二月廿七日
三月十三日
三月十四日
五月 五日
五月 十日

京都裁判所ヲ府廳内ニ設置ス、
詔シテ神武天皇即位ノ年ヲ以テ紀元トス、
詔シテ徵兵ノ制ヲ定ム、
太陰曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用井是日ヲ以テ明治六年一月一日トス、

新年紀元節天長節ヲ以テ三大節トナシ、百官ニ賀表ヲ上ラシメ、
酺宴ヲ賜フ、五節句ヲ廢ス、

六鎮臺軍管ヲ定ム、
二條城ヲ以テ陸軍省ノ所轄ニ屬シ、京都府ニ管理セシム、
外務卿副島種臣全權大使トナリ、支那ニ赴ク、
皇宮内ニ博覽會ヲ開ク、

此ヨリ四年間、三月ヲ以テ皇宮内ニ開會セリ、
外國人ト婚嫁ヲ許ス、
東京皇城火アリ、車駕赤阪離宮ニ避ケ、以テ假皇居トス、
西郷隆盛ヲ陸軍大將トス、

六月十八日
七月 七日

京都裁判所ヲ有栖川宮舊地ニ移ス、
比叡山中山城近江兩國界ヲ定メ、京都府ト滋賀縣トニ分轄セシム、

七月廿八日
八月 廿日
九月十三日
十月 廿日

詔シテ全國地租ヲ改正シ、地券ヲ設ク、
始メテ銀行紙幣ヲ發行ス、
特命全權大使岩倉具視等歐洲ヨリ還ル、
車駕太政大臣三條實美ノ第二幸シ、其病ヲ親問ス、又右大臣岩倉具視ノ第二幸ス、

十月廿四日
十月廿五日

西郷隆盛參議近衛都督ヲ罷ム、
參議副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平罷ム、大木喬任、伊藤博文、勝安芳參議ニ任ス、

十一月十日
十二月廿五日
明治七年 甲戌
正月十四日

內務省ヲ置ク、
島津久光內閣顧問ニ任ス、
賊右大臣岩倉具視ヲ要撃ス、
副島種臣等建議シテ民選議院ヲ置クヲ請フ、

二月 四日

江藤新平、島義勇等亂ヲ佐賀ニ起ス、
嘉彰親王ヲ征討總督トシ之ヲ討ス、

四月十三日

江藤新平、島義勇ヲ梟シ、副島義高等十人ヲ斬ル、
島津久光左大臣ニ任ス、

五月 二日

初メテ地方官會議ヲ開ク、

五月廿二日

是ヨリ先キ陸軍中將西郷從道ヲ都督トシ臺灣ヲ征ス、此日
臺灣平ク、

七月

外國條約改正ヲ延期ス、

八月 一日

大久保利通ヲ全權大臣トシ支那ニ遣ス、

明治八年

亥乙

二月廿五日

英佛橫濱ノ駐兵ヲ撤ス、

三月 八日

木戸孝允參議トナル、

三月十二日

板垣退助參議トナル、

四月十四日

詔シテ元老院大審院ヲ置キ、地方官會議ヲ始メ、左院右院ヲ
廢ス、

四月廿四日

建勳神社ヲ舟岡山ニ建テ、別格官幣社トス、

五月 七日

樺太ヲ以テ露國千島ト交換ス、

六月 廿日

初メテ地方官會議ヲ開キ、車駕臨幸ス、

六月廿八日

新聞條例讒謗律ヲ發布ス、

七月 二日

京都府知事長谷信篤議官ニ任ス、

七月 五日

元老院ヲ開ク、

七月二十日

京都府參事榎村正直知事ニ任ス、

八月 三日

地租改正事務局ヲ置ク、

八月 廿日

朝鮮兵江華島ニ我軍艦ヲ砲撃ス、

十月廿七日

左大臣島津久光、參議板垣退助職ヲ辭ス、

十一月

同志社開校ス、

明治九年

丙子

三月廿八日

廢刀ノ令ヲ布ク、

四月十八日

大ニ府縣ノ廢合ヲ行フ、

六月 二日

車駕奧羽ニ巡ス、

六月十二日

泉涌寺以下皇室ニ關係アル三十三寺院ニ毎年宮内省錢穀ヲ
賜ハリ、又般舟院以下百十餘寺ノ歷朝尊像位牌ヲ泉涌寺ニ移

六月廿六日
 七月廿一日
 八月廿一日
 九月六日
 十月廿四日
 十月三十一日
 十二月五日
 是歲

明治十年_{丁丑}

一月四日
 一月十日
 一月廿八日
 一月三十日
 二月十五日

京都大阪間ノ鐵道成ル、
 車駕還幸、

豐岡縣ヲ京都府ニ合ス、大ニ諸縣ノ廢合ヲ行フ、
 車駕太政官ニ臨ミ、憲法制定ノ詔ヲ下ス、

熊本神風連鎮臺ヲ襲フ、
 前原一誠等兵ヲ萩ニ起ス、捕ヘテ之ヲ斬ル、

皇后京都ニ行啓ス、
 京都府集産場ヲ設ク、

地租ヲ減シテ地價百分ノ二分五厘トス、民費ハ正租ノ五分
 ノ一ヲ過クルコトナカラシム、

華族部長局ヲ京都ニ設ク、
 車駕京都ニ行幸ス、

泉山ニ行幸親シク先帝ヲ祭ル、
 西郷隆盛等叛シ兵ヲ率ヰテ鹿兒島ヲ發ス、

二月十九日

三月

五月十九日

五月廿六日

五月廿八日

七月

八月十五日
 九月廿四日
 十二月廿七日

明治十一年_{戊寅}

五月三日

五月十四日

詔シテ西郷隆盛等ノ官位ヲ奪ヒ、熾仁親王ヲ征討總督トシ
 西征セシム、

京都府蒲生野ニ假農牧學校ヲ開キ、米人ヲ教師トス、
 車駕木戸孝允ノ旅館ニ幸シ、其病ヲ問フ、

内閣顧問木戸孝允京都ニ薨ス、
 詔シテ孝允ニ正二位ヲ贈ル、

車駕還幸ス、
 此時車駕駐輦數月ニ亘ル、市中學校ヲ天覽シ、又山階宮等ニ
 行幸アリ、

第一回内國勸業博覽會ヲ東京ニ開ク、
 鹿兒島城山陥リ、西郷隆盛等皆死ス、

紙幣二千七百萬圓ヲ増發ス、

地方官會議ヲ以テ府縣會規則、郡區町村編制法、及ヒ地方稅
 則ヲ議定シ、七月ニ至リ之ヲ頒布ス、

賊内務卿大久保利通ヲ要シ、之ヲ途ニ殺ス、

六月五日
八月三十日
是月

十一月九日
十二月五日

明治十二年 卯巳
三月

四月

五月

七月

八月三十日

九月

十一月七日

明治十三年 辰庚
二月廿八日

春秋皇靈祭ヲ定ム、

車駕北陸東海二道ニ巡幸ス、

京都府書籍館ヲ開ク、

車駕還幸ス、

京都ニ盲啞院ヲ創ス、之ヲ本邦盲啞學校ノ嚆矢トス、

京都府下郡區町村編制法ヲ實施シ、京都市ヲ上下二區ニ分ツ、

琉球藩ヲ廢シ、沖繩縣ヲ置ク、

獨國皇孫來遊ス、

米國前大統領グラント來遊ス、

皇子降誕、明宮ト稱ス、

學制ヲ廢シ、教育令ヲ行フ、

京都市始テ區會ヲ設ク、

始メテ內閣ト諸省トヲ分離ス、

四月五日

四月十七日

六月十六日

七月十七日

七月廿日

七月廿三日

明治十四年 巳辛
二月

三月

四月 七日

七月三十日

十月十一日

十月十二日

十月廿九日

明治十五年 午壬

集會條例ヲ發布ス、

國會期成同盟會員八万七千人總代片岡健吉上京建白ス、

車駕京都山梨三重ノ一府二縣ニ巡幸ス、

刑法治罪法ヲ制定ス、

車駕湊川ニ至リ、楠正成ニ正一位ヲ贈ル、

車駕還幸ス、

北垣國道京都府知事ニ任ス、

第二回內國勸業博覽會ヲ東京ニ開ク、

農商務省ヲ置ク、

車駕北海道及秋田山梨ノ二縣ニ巡幸ス、

車駕還幸ス、

來二十三年國會開設ノ詔ヲ發ス、

大隈重信ノ職ヲ罷ム、

自由黨成ル、

一月 四日
三月 四日
三月 十四日
六月 廿七日
七月 廿三日
十一月 十五日
十二月

明治十六年 癸未

七月 廿日
九月 五日

十二月 廿八日

明治十七年 甲申

三月 十五日
七月 廿九日

聖上親諭ノ詔ヲ陸海軍ニ下ス、
立憲改進黨成ル、

勅シテ參議伊藤博文ヲ歐洲ニ派遣シ、立憲政ヲ視察セシム、
日本銀行設立、

朝鮮兵我公使館ヲ襲フ、
京都華族部長局ヲ廢ス、

勅修幼學綱要成ル、

右大臣岩倉具視薨ス、太政大臣正一位ヲ贈ル、

琵琶湖疏水工事ヲ起サントシ、始メテ京都市ニ勸業諮問會ヲ
起ス、

徵兵令ヲ改正ス、

地租條例ヲ制定ス、

華族令ヲ定メ、公侯伯子男ノ五等ニ別テ、維新元勳木戸大久
保二氏ヲ侯爵ニ、其他ヲ伯爵以下ニ叙ス、

十二月 五日

明治十八年 乙酉

一月 九日
四月 十五日
四月 十八日
六月 二日
六月 廿五日
七月 廿六日
八月 十二日
十二月 廿三日

二條城ヲ以テ離宮トナス、

清韓ノ兵、我在韓兵ヲ途ニ要撃シ、又公使館ヲ襲フ、

日韓談判成ル、

日出新聞ヲ發行ス、

天津ニ於テ日清條約成ル、

京都疏水工事起工式ヲ行フ、

京都府廳ヲ二條城ヨリ、上京區藪ノ内町ニ移ス、

車駕山口、廣島、岡山三縣ニ巡幸ス、

教育令ヲ改正ス、是日車駕還幸ス、

太政官ヲ廢シ、内閣ヲ組織シ、參議伊藤博文ヲ總理大臣トナ
ス、

明治十九年 丙戌

一月 廿六日

五月 一日

八月

北海道廳ヲ置ク、

條約改正談判第一回ヲ外務省ニ開ク、

虎列刺病大ニ流行ス、

十一月
明治廿年亥丁

護王神社ヲ葛野郡高雄山ヨリ京都市ニ遷ス、

三月十四日

内帑金ヲ出シテ海防費ニ給ス、

三月十九日

所得税法ヲ發布ス、

十二月五日

前左大臣嶋津久光薨ス、

十二月廿五日

保安條例ヲ發布ス、

明治廿一年子戊

車駕京都ニ行幸シ先帝廿年祭ヲ行フ、

一月廿五日

大隈重信外務大臣ニ任ス、

二月一日

車駕還幸ス、

二月廿四日

市町村制ヲ發布ス、

四月十七日

伊藤博文内閣總理大臣ヲ辭シ、黒田清隆之ニ代ハル、

四月卅日

伊藤圭介等ニ博士號ヲ授ク、博士號此ニ始マル、

五月七日

愛宕郡岡崎、聖護院、吉田、淨土寺、南禪寺、鹿谷、清閑寺、今熊野、八村

六月

ヲ京都市ニ編入ス、

八月十五日

岩代國盤梯山破裂ス、

明治廿二年丑巳

一月十一日

皇城成ル、車駕赤坂假皇居ヨリ遷御ス、

二月十一日

憲法ヲ發布シ、皇室典範ヲ定ム、此日西野文太郎文部大臣森

三月廿二日

有禮ヲ害ス、

六月十八日

三府特別市制ヲ布ク、

七月十七日

始メテ京都市參事會ヲ開ク、

九月十日

榎原神宮成ル、

十月二日

京都及大坂和歌山洪水、

十月十八日

第三高等中學校ヲ大坂ヨリ京都ニ移ス、

十月廿五日

京都東京間鐵道開通シ、天皇皇后京都ニ行幸ス、

明治廿三年寅庚

來嶋恒喜外務大臣大隈重信ヲ傷ク、

一月九日

黒田清隆内閣總理大臣ヲ辭シ、内大臣三條實美之ヲ兼ヌ、

三月廿六日

衆議院議員選舉法施行規則ヲ發布ス、

四月二日

第三回内國勸業博覽會ヲ東京ニ開ク、

車駕尾張參河ニ陸海軍演習ヲ閱ス、

車駕尾張參河ニ陸海軍演習ヲ閱ス、

四月四日
四月九日
四月十八日
四月廿八日
五月七日
十月廿日
十一月廿八日

明治廿四年 卯辛

皇后京都ニ行啓ス、
琵琶湖疏水工事成ル、通水式ヲ行フ、天皇皇后臨幸ス、
車駕神戸、吳、佐世保ニ行幸ス、皇后ハ奈良兵庫二縣ニ行啓ス、
車駕京都ニ行幸ス、
元老院ヲ廢ス、
教育ノ勅語ヲ下ス、
第一回帝國議會開院式ヲ行フ、
内大臣三條實美薨ス、
山縣有朋内閣總理大臣ヲ辭シ、松方正義之ニ代ル、
津田三藏露國皇太子ヲ大津ニ傷ク、
車駕遼ニ京都ニ行幸ス、
露國皇太子ノ旅館ニ臨幸ス、
支那北洋艦隊提督丁汝昌艦隊ヲ以テ橫濱ニ來ル、詔レテ之ヲ延見ス、

十月廿八日
十二月廿五日

明治廿五年 辰壬

一月廿八日
七月廿日
七月廿九日
八月八日
十月廿一日

明治廿六年 巳癸

九月一日
十一月四日
十二月廿七日
十二月卅日

明治廿七年 午甲

六月二日
七月一日

美濃尾張地大ニ震ス、京都亦震フ、
帝國議會解散セラル、
豫戒令ヲ發布ス、
京都府知事北垣國道北海道長官ニ任シ、千田貞曉之ニ代ル、
内閣總理大臣松方正義辭職ス、
樞密院議長伊藤博文内閣總理大臣ニ任ス、
第一第二師團下野ニ大演習ヲ行フ、車駕臨幸ス、
紀念殿地鎮祭ヲ行フ、
京都府知事千田貞曉非職トナリ、中井弘之ニ代ル、
藤原惺窩ニ正四位ヲ贈ル、
帝國議會解散セラル、
帝國議會解散セラル、
京都市桓武帝莫都紀念祭第四回内國勸業大博覽會、京鶴鐵道

九月十日
九月十四日

成立祝宴ヲ開ク、
第三高等中學ヲ改メテ高等學校ト爲ス、

征清ノ爲メ大本營ヲ廣嶋ニ進メ、車駕親征、此日京都ヲ過ク、

是ヨリ先キ七月二十四日、我兵朝鮮京城ニ入ル、廿五日海軍

清國海軍ヲ豊嶋ニ破ル、八月一日宣戰ノ大詔下ル、此ニ及ヒ

車駕親征アリシナリ、

鴨河運河疏通式ヲ行フ、

京都市議事堂上棟ス、

京都府知事申井弘薨ス、

臨時國會ヲ廣嶋ニ召集シ、軍事費ヲ議セシム、

朝鮮報聘使京都ヲ過ク、

貴族院議員渡邊千秋京都府知事ニ任ス、

明治廿八年未乙

平安神宮鎮座式ヲ行フ、

皇后大本營ニ行啓シ、京都ヲ過ク、

皇后大本營ヨリ京都ニ行啓ス、

三月十五日
三月十八日
四月廿六日

四月廿七日

詔シテ大本營ヲ京都皇宮ニ移シ、天皇廣嶋ヨリ行幸ス、官民大ニ七條ニ奉迎ス、

客年九月十四日、天皇大本營ヲ廣嶋ニ進メ、以テ征清ノ軍事

ヲ董督シ、遙ニ方略ヲ授ク、其十六日、我軍平壤ヲ陥ル、十七日

海軍大ニ清國艦隊ヲ黃海ニ破ル、十月卅一日鳳凰城ヲ取リ、

十二月六日金州ヲ陥レ、同廿二日旅順口ヲ取ル、十二月十三

日海城ヲ陥ル、本年二月二日講和使來ル、之ヲ斥ク、同十四日

威海衛降ル、三月四日牛莊ヲ取ル、十六日詔シテ彰仁親王ヲ

征清大總督ニ任シ、戰地ニ赴ク、三月廿四日澎湖群島ヲ取ル、

清國李鴻章ヲシテ全權大臣トシ、來リテ和ヲ求メシム、此日

暴徒ノ傷ク所トナル、詔シテ休戰ヲ許ス、四月十八日講和條

約成ル、清國盡ク我要約ニ服ス、詔シテ天下ニ宣布ス、此ニ及

ヒ大本營ヲ京都ニ移シ、廣島ヨリ京都ニ行幸アリシナリ、

平安通志卷之六十大尾

明治二十八年十月二十日印刷
明治二十八年十月廿五日發行



發行者兼

京都市參事會

京都市上京區下立賣通新町西
入敷ノ内町

右代表者

京都市紀念祭委員長

内 貴 甚 三 郎

京都市上京區押小路通柳馬場
東ニ入橋町廿五番戶

小 谷 義 一

京都市下京區新町通佛光寺下ル
岩戶山町第四十二番戶

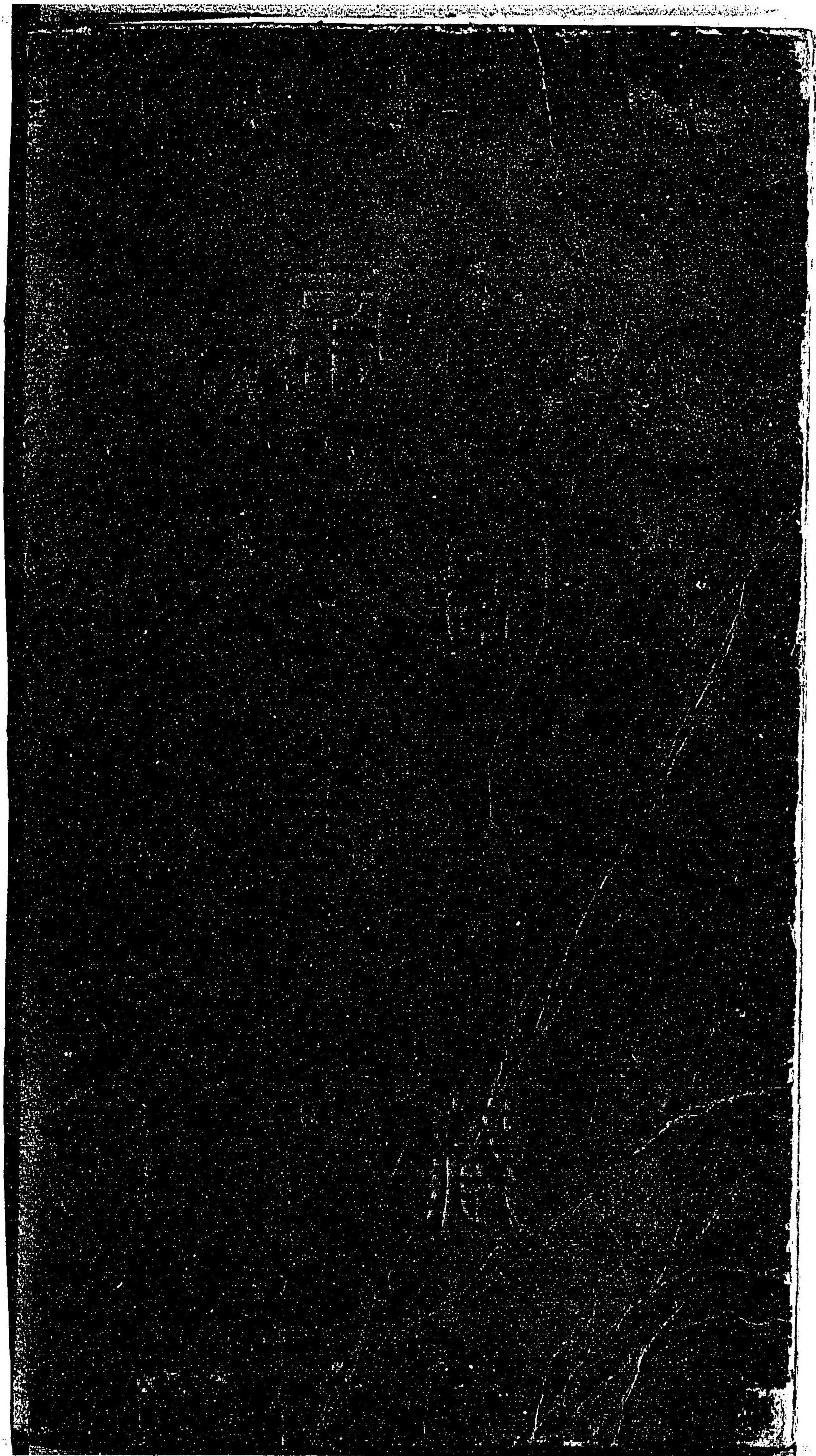
印刷所

博 成 堂

京都市下京區室町通綾小路下ル
白樂天町第三十三番戶

十六		九十五		八十五					卷					
二十	十二	六	三	十二	一	廿八	廿六	十六	十五	十三	十二	二	一	枚表裏
○京都府	○陵告	○浦賀	○岩清水	○長享	○五十三	○自年二千	○補記	○七十四	○六十年	○五十九	○三十六	○八十三	○六十年	誤
○京都府	○陵告	○浦賀	○石清水	○長享	○四十三	○自二千	○補任	○七十八	○六十二年	○五十八	○三十五	○八十一	○五十九	正
○八	○十	○四	○四	○四	○四	○廿八	○廿七	○十五	○十四	○十二	○五	○一	○一	枚表裏
○鹿兒	○八月十八日	○改元ノ上	○享祿	○永享	○七十二年	○文中二三	○元享	○六十六	○六十年	○四十九	○八十三	○七十二年	○七十二年	誤
○鹿兒	○倒置	○文化一先帝ノ號	○享祿	○永享	○七十年	○文中二	○元享	○六十七	○五十九	○四十七	○八十二	○七十年	○七十年	正
○十九	○十一	○五	○七	○三十	○七	○廿八	○十九	○十六	○十四	○十三	○五	○二	○二	枚表裏
○京都府	○講ス	○第四行	○貞享	○享德	○七十二年	○關白院	○後伏見花園ニ上皇	○六十三	○六十三	○四十九	○九十四	○七十二年	○七十二年	誤
○京都府	○謝ス	○倒置	○貞享	○享德	○七十一年	○關白記	○後伏見花園ニ上皇	○六十八	○六十一	○四十八	○九十二	○七十一年	○七十一年	正

110
10
60



110
合10
60

平安通志

十九
上